

資料

(平成十三年十月)

第四十六回「合宿教室」(富士)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣

合宿教室46回の歩み 累計参加が人員 一一一五二八名

第四十六回 “合宿教室（富士）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成十三年八月二日（木）から六日（月）まで四泊五日間  
 ところ 静岡県「富士のさと国立中央青年の家」  
 参加総数 一五〇名

目次

“はしがき”に代へて	2
理事長・上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）	6
第46回“合宿教室”のあらまし	7
走り書きの“感想文”と第二回目の“短歌詠草”	27
参加者全員	27
短歌詠草	81
参加者全員	81
合宿中の創作作品	81
参加者全員	81
あとがき	97
カメラ・レポート27枚（29ページから79ページの左頁に掲載）	97

# “はしがき”に代へて

上村和男

(本会理事長・株千代田コンサルタント相談役)

昭和三十一年(一九五六年)の本会創立以来「合宿教室」は主として九州各地で行なはれて来ましたが、平成三年から九州地区と関東地区で隔年毎に開催されるやうになりました。爾来四十五年間続けられ、今年は一昨年開催された静岡県御殿場市の「国立中央青年の家」で、八月二日から八月六日までの四泊五日の第四十六回「合宿教室」が開催されました。

全国津々浦々から馳せ参じて下さった参加者諸君(一五〇名)は、少数ながら精銳の集ひとなり、充実した合宿運営が執り行なはれました。

参加者は旅装を解く間もなく開会式(八月二日午後三時)に列席し、神戸大学四年北村幸二君の力強い「開会宣言」に続いて国歌斉唱を二回、ついで「祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての先人の御霊」<sup>みたま</sup>に対し、一分間の黙禱<sup>もくとう</sup>を捧げました。そのあと参加者を代表して東京大学二年石村善之亮君は「この合宿教室は、大学では得がたい感動や学問の喜びを感じる講義があり、是非何かに感動する自分を見つけて下さい」と、合宿生活で目指すべきポイントを訴へた。これに対して、全参加者は「この合宿教室に参加したからには、自分から進んで飛び込んでいかななくては」との気持ちに強くさそはれていったやうでした。都会の猛暑続きをよそに、毎日、秀峰富士山を真近に仰いでの涼しい快適な四泊五日の実りある合宿教室はこのやうにしてスタートしました。

今回の「合宿教室」にお招きした講師のお二方は、第二日目の午前が日本政策センター所長の伊藤哲夫先生であられ、一方は、第三日目午前の埼玉大学教授の長谷川三千子先生であられた。伊藤先生は「近隣諸国の動向と日本の主権」といふ演題で講義され「占領政策は日本民族を二度と立ち上げないやうにする為のもの」で、民族独立への険はしさを東京裁判等を通して述べられた。また小泉総理の靖国参拝等に関連し、中国政府の干渉に対し我が国の政治家がいかに迎合的であるかを話され、「国家は悪によって滅びるのでなく、愚によって滅びる」と強調された。また長谷川先生は「日本の思想」といふ演題で、日本には思想とよべるやうなものはないと云ふ丸山真男氏の論理を本居宣長を通して論破されていった。宣長は近隣との

戦争などがない中で、「日本人の文化を日本人の目で見て発見し、日本人のアイデンティティを自覚できた人である。日本人は文字のない時代に豊かな心でもって大和言葉を漢文で表はし、日本人の心を示して来た。かういふことを追体験し、日本の思想といふものを考へてゆかねばならない」と語られ、日本の思想を否定する風潮が盛んだからこそ「我々は、宣長を通じて日本の思想を再認識する必要がある」と結ばれ、参加者に多大な感銘を与へられた。

さて、この合宿教室では「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界平和」といふ四つの命題を従前から掲げて来ました。今の大学生活ではこれら四つの命題に何ら統一性も関連性も見られない。学問するとはどういふことかが見失なはれ、ましてや祖国日本といふ言葉も忘れ去られようとしてゐる中で日本人として如何に生きるべきかとの問ひかけもないままに精神の混乱をきたし、「心を鍛へることの重要性」が失なはれてしまつてゐる。従つて、「合宿教室」では、班別研修や和歌相互批評を通して、自己主張と知識の披瀝に終ることなく、他人の意見を謙虚になつて心を傾けて聴き、相手の意見を尊重してお互に心を通ひ合せながら友情を深めてゆくことに意を注いでゐる。四泊五日の起居を共にすることにより見ず知らずの友が心を開いて真の友情の世界が実現されてゆきます。かうした人生において基本的な人間生活の営みが現今の学生生活の中にも社会生活の中でも忘れ去られてしまつてゐて自分本位の生き方がまかり通つてゐることは残念でなりません。合宿生活を実体験することにより、何かが変はる第一歩となり、日本の国が少しでも良くなることにつながつてゆくことと確信してゐます。

ところで、小泉総理の八月十五日の靖国神社参拝は、中韓の内政干渉により、八月十三日に行なふといふ為<sup>ていなく</sup>体であった。公言してゐたにも拘らず国民への信義を裏切り、その上に村山発言を踏襲し、こともあらうに我が国の戦前を「誤つた国策にもとづく植民地支配と侵略を行なつた悔恨の歴史であつた」との談話には失望を禁じ得ない。英霊に対して無礼であり、総理の不見識と歴史観の欠如を悲しく思ふのである。

今回の場合小泉総理が靖国神社に八月十五日に参拝することは近隣諸国に日本の主権と日本人の矜持を示す絶好の機会であつたにも拘はらずこれを失つてしまつた。

かつて中曽根元総理は中韓の内政干渉により靖国神社参拝を中止してしまつた。靖国問題は、全く国内問題で国の為に命を捧げた英霊を尊崇することに他国に干渉される何の理由もない。かうしたことを繰り返すのは政治家が東京裁判史観に呪縛さ

れてゐる結果さうなるのではなからうか。その呪縛から解放され正しい歴史観を形成し祖国の眞の姿を内外に示し続けることが今こそ必要である。かういふことだからアメリカで起つた同時テロの問題の対処にしても憲法の範囲内とか、法律を越えてはならないとかの議論に終り中々結論を出せないでゐる。この際、国会に憲法改正の議案を提出すべきと思ふ。さうでないと、北朝鮮よりテロ行為が行なはれた場合、我が国はどのやうな態度で臨むのだらうか。日米安保により、米国に解決してもらふ以外手立はないのか。政治家は国を守り、国民の安寧を維持できるのか不安に感じてゐるのが一般の国民の気持であらうと思ふ。

この合宿で各々の講師は日本人であることの誇りをもって、日本の歴史・文化・伝統を学び、心を鍛練して正しい学問の道を目指すことが急務であることを訴へられた。また、助言者たちは、お互に心を許し合へる友だちを求め、眞の学問の友が得られるやうに研鑽を積み重ねてゆくことが大切であることを訴へて下さった。

ここに編した「感想文集」は、全参加者が「解散間ぎは」に走り書きで提出して下さったものです。紙面の都合で全文をそのまま載せ得なかつたことは、お許しを願ひます。またこの「感想文集の編集」には、十余名の方々（編集後記に記載）が余暇をさいて取り組んで下さったことも心から感謝致します。

最後になりましたが、この合宿事業を行なふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に對しまして、会員一同に代り、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成十四年）の「第四十七回合宿教室」は、八月八日（木）～八月十二日（月）までの四泊五日間、広島県「国立江田島青年の家」で開催することが決定し、「合宿教室運営委員長」には山口県立下松高校教諭の寶邊矢太郎氏（数へ年四十九歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段の御協力をよろしく御願ひ申し上げます。



第46回全国学生青年合宿教室夏季セミナー（平成13年8／2～8／6）於「富士のさと国立中央青年の家」

参加者

（学生班 四十一大学）（洋数字は参加学生数）

- 北海学園大 1 東北女子短大 3 東北女子大 4 東北大 1
  - 新潟工科大 1 筑波大 1 亜細亜大 3 慶應大 1 國學院大 1
  - 成蹊大 1 多摩美術大 1 東京大 2 東京芸大 1 東洋大 1
  - 日体大 1 武蔵工大 1 明星大 1 明治大 1 早稲田大 7
  - 防衛大 1 京都在 3 同志社大 1 立命館大 1 大阪大 1
  - 神戸大 2 鳥取大 1 岡山大 1 岡山理科大 1 山口大 1
  - 山口県立衛生看護学院 1 愛媛大 1 九州大 1 九州工大 1
  - 西南学院大 1 福岡教育大 1 福岡県立大 1 福岡女子大 1
  - 佐賀大 1 長崎大 1 熊本大 1 熊本学園大 1
- 計 五十八名（うち女子十七名）

（社会人・教員参加者） 十二名

（招聘講師） 三名（雅楽演奏者） 三名

（国民文化研究会） 六十七名

（事務局） 三名（写真） 一名

（見学参加者） 三名

総計 一五〇名

# 第46回（平成13年）“全国学生青年合宿教室” 日程表

	8月2日(木)	8月3日(金)	8月4日(土)	8月5日(日)	8月6日(月)
6:30		(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃	(起床) 洗面・清掃
7:00		(7:00) 朝の集い (国旗掲揚・国歌斉唱、体操) 班別散策	(7:00) 朝の集い (国旗掲揚・国歌斉唱、体操) 班別散策	(7:00) 朝の集い (国旗掲揚・国歌斉唱、体操) 班別散策	(7:00) 朝の集い (国旗掲揚・国歌斉唱、体操) 班別散策
8:00	(注意) ↓ 学生参加者は、 の班編成です。 会場入口受付で、 所属する班 を確認のこと。	朝食 (8:30) 講義 「近隣諸国の動向と日本の主権」 日本政策研究センター所長 伊藤 哲夫 先生	朝食 (8:30) 講義 「日本の思想」 埼玉大学教授 長谷川 三千子 先生	朝食 (8:30) 講義 「日本の國柄」 福岡県立嘉穂高校教諭 小野 吉宣 先生	朝食 (8:30) 清掃 (9:30) 合宿を顧みて 国民文化研究会会長 小田村四郎氏 合宿運営委員長 山口秀範氏
9:00		質疑応答 (10:00) (10:30)	質疑応答 (10:00) (10:30)	質疑応答 (10:00)	参加者による 全体感想自由発表 (11:00)
10:00		班別研修	班別研修	班別研修	感想文執筆及び 第二回短歌創作 (12:00)
11:00		(12:00) 短歌創作導入講義 須後信用金庫勤務 須田 清文 先生 (1:00) (昼食)	(12:00) (記念写真撮影) 野外炊飯 野外活動	昼食 (1:00) 講話 「雅楽への誘い」 日本芸術院会員 東儀 俊美 先生	昼食 (1:00)
12:00	随時受付	レクリエーション	野外活動	講話 「雅楽への誘い」 日本芸術院会員 東儀 俊美 先生	閉会式 (挨拶) 国民文化研究会・副理事長 岡賀直商店 会長 賀道正久 氏 (2:00)
1:00		第一 回 短歌 創作	創作短歌全体批評 国立療養所福岡東病院副院長 小柳 左門 先生 (3:00)	短歌相互批評 (短歌再提出)	解散 (2:00)
2:00	開会式 (3:00) (挨拶) 国民文化研究会・理事長 上村和男氏 オリエンテーション (合宿趣旨説明) 合宿運営委員長 山口秀範氏 (諸注意伝達) 合宿指揮班長 菅原亨二氏 (青年の家からの注意) (4:30)				
3:00					
4:00					
5:00	班別自己紹介 事務連絡打ち合せ (5:30)				
6:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩 (短歌提出)	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	
7:00					
8:00	合宿導入講義 「歴史認識と父祖の物語」 福岡県立太宰府高校教諭 占部 賢志 先生 (9:00)	輪読導入講義 「吉田松陰【論孟誡話】」 新日本製鐵㈱嘱託 今林 賢郁 先生 (9:00)	体験発表 熊本製粉㈱ 吉村 浩之 氏 主婦 工藤 千代子 氏 (8:30) 警署長の説明 小田原市立下野小学校校長 若林豊雄先生 (9:00) 慰霊祭 (9:30)	講話 「若き友らへ語りかける言葉」 国民文化研究会常務理事 長内 俊平 先生 (8:30)	
9:00					
10:00	班別研修	班別輪読	班別懇談	夜の集い	
11:00	就床 (10:30) (11:00) 消灯	就床 (10:30) (11:00) 消灯	就床 (10:30) (11:00) 消灯	就床 (10:30) (11:00) 消灯	

\* 社会人特別コース……集合8月3日午前8:00  
解散8月5日午後3:00

# 第四十六回 “合宿教室” のあらまし

## 第一日目

(八月二日・木曜日)

第四十六回全国学生青年合宿教室は、静岡県御殿場市「富士のさと国立中央青年の家」において開催された。ここでの合宿教室開催は二度目である。霊峰富士の雄大な姿を間近に仰ぎ、木々の緑に囲まれた素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から学生・社会人が次々と参加した。おのおの受付を済ませると宿泊棟の各班室に入り、初めて顔を合はせる班員たちと挨拶を交はして、ただちに開会式に臨んだ。

## 開会式

神戸大学四年北村幸一君の開会宣言の後、国歌斉唱に続いて、祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての御霊に対し、一分間の黙祷を行った。主催者を代表して、本会理事長上村和男氏は、「ゆきすぎた個人尊重の結果、人として生きていくための徳目が失はれ、日本は亡国への道をたどつてゐるのではないか。日本の国のことを自分のことのやうに考へ、国と自分との関わり合ひといふことを真剣に考へてほしい」と語られた。続いて、参加者を代表して、東京大学三年石村善之亮君は、「この合宿は大学では得がたい感動や、学問の喜びを感じる講義があり、ぜひ何か感動するものを見つきたい。共にがんばりませう」と挨拶

拶した。

## 合宿導入講義 「歴史認識と父祖の物語」

福岡県立太宰府高校教諭 占部賢志 先生



先生は、「今日の問題の核心は、自分といふものがわからなくなっていることです」と指摘され、日本の小学生百人のうち十三人しか自分を評価できるものを持たないといふ平成七年の調査結果と、同じ頃社会を震撼させた神戸市の小学生殺傷事件を起こした中学生の「透明な存在であるボク」といふ自己規定の言葉に共通するものがある事に注意を喚起された。

そして先生は、歴史に学ぶことを考へる切口として「父祖の物語」の重要さを指摘され、合宿地ゆかりの富士山頂で、明治二十八年世界初の冬期三千メートル級高地気象観測を為し遂げた野中至・千代子夫妻の偉業とその思ひを、当時の新聞、日記を辿り偲ばれた。そして授業でこれを取り上げた際の生徒の感想文「昔の人々の中には、自分の命をなくしても守りたいものがあつた。使命感や愛情を持つことは生きる意味を持つことだ」を紹介され、「今の十七歳の子供でも、何かに触れることでかうした言葉を使ふやうになる」と補足された。更に台湾人の教育に殉じた芝山巖六士先生の「物語」も紹介し、参加者に感動を与へられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に続いて行はれた。お互ひに初対面のせぬか、最初は緊張して意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひな

がら、班員相互の心の交流が深められていった。

## 第二日目

(八月三日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行って、一日の研修を新たに迎へた。

なほ、合同の集ひのあと、合宿参加者には和歌が印刷された一枚の短冊が配布され、その和歌の拝誦と紹介が行はれた。紹介された和歌は次の通りである。

二日目 (八月三日)

今上天皇御製

空

外国の旅より帰る日の本の空赤くして富士の峯立つ

三日目 (八月四日)

若山牧水「友をおもふ歌」より

いま来よと言ひ告げやらばな為し難がたき事をして来む友をしぞおもふ

四日目 (八月五日)

明治天皇御製

冬泉

冬ふかき池のなかにもほとばしる水ひとすじはこほらざりけり

講義 「近隣諸国の動向と日本の主権」

日本政策研究センター所長 伊藤 哲夫 先生



伊藤先生はまづ、日本の南西諸島海域において中国の艦船がいかにわが国の安全を脅かす行動を取ってゐるかを指摘され、中国がこの海域に軍事上の支配を確立しようとしてゐる現実を詳しく紹介された。

次いで先生は、小泉首相の靖國神社参拝に関する中国政府の容喙ようかいに対し、わが国の政治家がいかに迎合的であるかについて、「東京裁判の所謂A級戦犯いはゆるに対する断罪そのものが誤りである。A級戦犯の合祀がみしは、主権回復時の国会が戦争裁判受刑者を一般戦没者と同じく公務上の死亡者と認定したこと

に基いてをり当時の多数の日本国民が支持してゐた」と指摘され、「中国の主張に迎合してゐる人々は愚かにも事実を知らない。国家は悪によって滅びるのではなく愚によって滅びる」と強調された。

「このやうな日本になつてしまつたのは、占領軍によるウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムの影響が大きい。日本人を二度と立ち上げられない民族にするための占領政策が徹底して行はれた。日本国憲法も占領軍の強制によって制定させられたし、そのやうな強制を正当化する理論さへも占領軍が与へた」と、当時の厳しい状況をたどられ、しかし、当時日本人がこれに唯々諾々と従つたわけではないことを歴史事実を挙げて紹介された。

「我々は日本の主権を守るべく戦つた先人の思ひに連なり、その思ひを裏切らないやうにすべきだ。先人の思ひを知り自分のものにするために勉強をしよう。そのやうな努力が国力にまで高められたときにこそ、この日本国は安泰になる」と訴へて講義を終へられた。

羽後信用金庫勤務 須田清文 先生



初めて短歌創作を行ふ参加者に対し、創作上の留意点を分り易く説明してゆかれた先生は、躍動する感動があれば自由自在に短歌が詠める例として、恩師、夜久正雄先生が詠まれた「しすがにうつくしきかな乙女をとめらが太陽に観衆にさらす大腿ふともも」といふ歌を紹介された。また、先生は自分自身に正直になつて真心を詠むことの大切さを訴へられ、明治天皇御製の「まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり」を紹介され全員で拝誦した。最後に、五感全てを使って感じたことを素直に短歌に詠むやう参加者を励まされた。

## レクリエーション（富士登山）

講義後、心待ちにしてゐたレクリエーションの時が来た。三台のバスに分乗し、富士宮口新五合目に向つた。そこから宝永火口を見下ろして戻ってくるコースを散策した。ひんやりとした山肌の冷気を感じながら山道を登り、班ごとに楽しく語りひつつ、しばしはやかなひとときを過した。合宿地に戻つた参加者は、散策の折りに心にとどめた情景を、また、これまでの日程の中で心揺さぶられたことを思ひ起し、短歌創作に余念がなかった。



先生は、「その生涯を終身死ぬまで変わらず『誠』を貫き通したのが、松陰といふ武士です。松陰の文章は質実明快であり、潑刺とした瑞々しい言葉が書き連ねられてゐる」と述べられ、講義に入っていました。

まづ、野山獄での孟子講読開始の様子を紹介され、文章を読んでは泣き、喜び、踊るといふ松陰の姿に、囚人たちが次第に講義に聴き入った様を偲ばれた。先生は、「人と生れて人の道を知らず……：豈に恥づべきの至りならずや」といふ言葉に触れて、「自分が生きる根源において恥づかしいと思ふ感覚を我々は失ってしまったのではないか。松陰にとつて、その恥づかしさが学問のスタートにあつたのです」と指摘された。さらに、『講孟餘話』の言葉を紹介されつつ、「獄において死んでも、後世に必ずその志を継ぐ者が現れるといふことは、松陰の生きた覚悟であり、確信だつた。精神の不朽を信じ、その道に殉じたのが松陰であつた」と述べられ、「自分自身も松陰の信じた『子々孫々』の一人として、万分の一でも志を継ぎたい。諸君もまた『子々孫々』の一人です。他人事でなく自分の問題だと考へてほしい」と訴へられた。

最後に、松陰の言葉の力強さに触れ、「かういふ言葉に触れたときは、心を開けつ放して、言葉の血しぶきを浴びてみたらいい。そのくらゐしないと、この力は伝はつてこない」と力を込めて結ばれた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。今林先生のご講義を振り返りながら、紹介された講孟餘話や書簡等の

文章を、皆で声に出して読み味はっていった。幕末動乱の時代に生きた吉田松陰の言葉に直接ふれて、松陰の志や思ひを偲び、感じとることができるときの貴重なひとときであった。

### 第三日目

(八月四日・土曜日)

### 講義 「日本の思想」

埼玉大学教授 長谷川 三千子 先生



歿後二百年を迎へた本居宣長を通じて「日本の思想」を根本から問ひ直したいと、講義の指針を示された長谷川先生は、「宣長を思想に値せぬ『単なるイデオロギー暴露』と批判したのが丸山真男である。彼に代表される近代日本の知識人による宣長批判、さらには日本の思想の否定は、実は近代欧米思想に毒された皮相な認識に過ぎない」と批判され、「宣長は、『漢意』と題した随筆で、日本人の生活感情が無意識のうちに漢意、つまり中国風に染まってゐることを繰り返し指摘した。『漢』といふ言葉を『近代欧米』と置き換へれば、そのまま我々の精神状況にも当てはまる」と今日に共通する問題を指摘された。

そして、外来の思想に染まる以前の日本人の姿を、宣長が発見したきっかけが、古事記との出会ひであったと論を進められ、「宣長はこの古事記成立の背景に非常な想像力を働かせ、注意深く考察してゐる。『古事記伝』からは、無文字の社会を経て中国語文字(漢字)に接し、これを音、訓練り交せて日本語表記に使ひこなし、口伝への神話、歴史を書き記した先人への驚嘆が伝はってくる」と宣長の学問をたどられ、「無文字の世界の豊さを今日に伝へ、同時に現代日本語の基礎を作り出した先人の英知を、我々も大きな財産として引き継いでゐる」と語られた。そして、この素晴らしい遺産に気づかない人々が、日本の思想を

否定する風潮が盛んだからこそ、「今我々は、宣長を通じて日本の思想を再認識する必要がある」と結ばれた。

## 野外炊飯

三日目の昼には、合宿としては初めての体験となる野外でのバーベキューが行はれた。班ごとに、薪を用意する人、火をおこす人、野菜を切る人、肉を焼く人等の役割を分担して調理が進められた。講師の長谷川三千子先生もこれに参加された。あちらこちらで炊事の煙が立ちこめるなか、やがて皆で力を合はせた料理ができ上り、楽しく語らひながら、おいしさうに料理を頬べる姿が見られた。張りつめた合宿の日程の中で、リラクセスした班員相互の交流のひとつときであった。

## 創作短歌全体批評

国立療養所福岡東病院副院長 小柳 左門 先生

先生は、昨日創作した参加者の歌をとり上げ、表現の不正確さ、誤りを指摘され、特定の言葉にとらはれ過ぎる事、オーバーな表現を排して行く事を添削しながら示していかれた。一方、感動を大切に、率直な気持ちを具体的に、平易な言葉で表現すれば、良い歌が出来る、山田輝彦先生他の歌を紹介された。



最後に明治天皇御製「こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞはふ國のすがたも」を引用され、思つてゐるところを素直に述べていくところに、教条主義やイデオロギーとは異質の、言挙げしない日本の思想の根拠がある事をお示しになった。

全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝えることが如何に難しいかを実感させられた。内心の思ひを十分に歌に表現できた時、大きな感動が生まれる。お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであった。

## 体験発表

はじめに登壇された熊本製粉（株）勤務の吉村浩之氏は、沖縄での過剰な反戦平和運動に触れ、自身の陸上自衛隊入隊の経験から「憎しみや恨みを抱いて運動する人は、人の心の繋がりを絶たう絶たうとしてゐるとしか思へない。私は逆に人と人との心を繋ぎたい衝動に駆られる」と語られ、大戦末期の沖縄が「本土の捨石」などといふ一語では決して片付けられない例として、決戦のわずか二ヶ月前に死を覚悟して、本土から赴任した島田<sup>あき</sup> 叡知事の事績を紹介された。赴任後、目覚しい活躍をされた知事は、二ヵ月後のアメリカ軍上陸後も食糧確保や避難等、県民のために心を砕き、最後は自害される。「戦争は悲惨です。しかし、私たちの祖先の崇高さと美しさが、民族の記録として残されてゐなければ、私たちは救はれない。まだそのやうな記録は沢山眠つてゐる」と語られた氏は、最後に島田知事の「物を失ふのは怖くない。心を失ふのが怖い」との言葉を引用されて、「失つた物は取り返さねばならない。その力は私たちの心の内にある」と力強く訴へられた。

続いて登壇された主婦の工藤千代子さんは、学生時代に合宿教室で学んだことによつて、母親になつても日本人としての誇りを持ちながら子供を育てられることに感謝をしてゐると語られた。そして現代の学級崩壊、不登校、虐待などについて、お子さんの学校を例に、「先生や親の言ふ事のうち、聞きたいことだけを聞きたいといふ子供が増えた。その原因は、物質的な豊かさを追

ひ求めて働く母親が増えた結果、親が子供ときちんと向き合はなくなったことにある」と述べられ、工藤家では今日嫌なことがあっても明日元気で学校に行けるやう、「子供が話したい時には待たせずに、外出しても子供が帰る時間には必ず家にゐるやうにすることを大切にしている」と披露された。最後にキャリアウーマンの友人が子供を持ち、母親の大切さを再確認して仕事をやめた話を紹介されて、「これからも祖先から受け継いだものを子供達に伝える母、主婦としての使命を全力で果たしたい」と語られた。

## 慰霊祭

慰霊祭に先立ち、小田原市立下曾我小学校校長の岩越豊雄先生が慰霊祭の意義と式次第、それに臨む際の心構へについて説明された。

続いて屋外に設けられた齋庭ゆにはで慰霊祭が厳粛に執り行はれた。参加者一同を代表して、坂東一男本会理事が祭文を奏上され、次いで鏗信弘氏ゆによる御製拝誦が行はれた。続いて、小田村四郎本会会長、上村和男本会理事長、山口秀範合宿運営委員長により玉串が奏奠され、一同拝礼の後、「海ゆかば」を斉唱、滞りなく終了した。この日は天候に恵まれなかったが、祭礼の間は美しい満月が齋庭を照らし、一同が

直会の御神酒を頂く頃、また月は雲間に隠れていった。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

## 祭文

ここ霊峰富士の裾野の広がる 御殿場国立中央青年の家「富士のさと」に集へる 社団法人国民文化研究会 理事長上

村和男をはじめ我ら百五拾余名 第四十六回全国学生青年合宿教室を営みて はや三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日はかくろひ 高原にそよ風吹きて 秀峰富士のさ霧ただよふこの富士のさと美まし「集ひの広場」を齋庭と定めまつりて とこしへにみ国を守ります遠つみ祖達をはじめ み国のために尊き生命を捧げたまひし もろもろのはらから達のみたまを招きまつりて み祭りを仕へまつらむとす

顧みれば 混迷を極めたる時代に 故小田村寅二郎大人の命を先頭に日本国民としての大道を求め 祖国日本の真正なる独立を果たさむと合宿教室を営み はや四十あまり六とせの回を重ねたり

我が国の政治 教育 マスコミ各界の混迷いまだ晴れたりとは言へねど 戦終りて五十年余にしてやうやく外国の厳しき圧力にも拘らず 新しき兆しみえはじめたり

小泉総理大臣の靖国神社参拝 或は新しい歴史教科書の動き等々の大きなうねりにならむとの兆しは 新しき局面の中で我が国民文化研究会にかけられし大いなる期待の中で迎へ これをさまざまぐる者は力の限り打ち払はむことを ここに謹みて祈り告げまつらむ

我れ等四十六年を連ね営みきたるこの学びのにはに相集ひ 伊藤哲夫 長谷川三千子両先生をはじめとする御講義に耳を傾け 講孟餘話の輪読に はたまた短歌の創作に心を開き心をかたむけ語りかはしつ み祖たちの尊きみ言葉を学び老も若きももろもろに心を鍛へ言葉を修め 祖国日本をとことには栄えゆかしめむと誓ひまつらむ

ここに我が日本の行くべき道をさだかに見定めむと心を合せ集ひを過ごしたれるさまを

畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひて み国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り 坂東一男謹み敬ひ恐み恐みも白す

平成十三年八月四日

御製拝誦

明治天皇御製

山

萬代の國のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり

神祇

ちよろづの神のみたまはとこしへにわが國民を守りますらむ  
國民のうへやすかれと思ふにもいのは神のまもりなりけり

をりにふれて

うつせみの世のことわざはしげくともものまなぶまのなかるべしやは

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

昭和天皇御製

橋

ふじのみね雲間に見えて富士川の橋わたる今の時のま惜しも

朝海

天地あめつちの神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

海上日出

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海の原に日はのぼるなり

折にふれて

老人をわかき田子らのたすけあひていそしむすがたたふとしとみし

靖国神社の九十年祭

ここのそぢへたる宮居の神々の國にささげしいさををぞおもふ

今上天皇御製

戦後五十年遺族の上を思ひてよめる

國がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

對馬丸見出ださる

疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされけり

講義 「日本の國柄」―尊いことが尊く見えてゐますか―

福岡県立嘉穂高校教諭 小野吉宣 先生



先生は、「現代の私達は、尊いものを尊いと感じる力が衰弱してしまつてゐる。それは、巧妙な専制政治ともいふべき戦後の占領政策によつて『歴史を見る目』を奪はれたためである」と指摘され、終戦直後に国体護持を国民に訴へた新聞の社説や、祖父母から胸を打つ歴史体験を聞かされた年少期の家庭教育の状況等を例に挙げながら、未だ健全であつたその当時の「物を見る目」を取り戻すことの大切さを強く述べられた。

次いで先生は、諸外国の大統領や王室が政変に際し亡命した事例と、昭和天皇が敗戦の折にマッカーサー元帥をお訪ねになり、国民を守るために戦争の全責任を負はうとされたことを対比され、またその会見でマッカーサーの態度が一変した事実と、終生ひと言も弁明されなかつた陛下の御人徳にも触れながら、天皇が負はれる「無限責任」の重大性に迫つていかれた。そして、昭和天皇の全国御巡幸が、占領軍の期待に反して、天皇と国民との結びつきを更に強める結果となり、戦後の奇跡的な復興の原動力となつたこと等を示され、「そこにこそ、共和制では到底及びえない我が国独特の國柄がある。今日、我々が、占領政策の呪縛から抜け出せないままでは、日本人としての力は何も生れてこない」と結ばれた。

日本芸術院会員 東儀 俊美 先生



東儀先生は、雅楽の歴史について、外来の雅楽が日本的なものに改められたこと、千数百年の年月の経過のうちに、韓国と日本では伝承された内容に相違が生じてゐることなどをビデオを見ながらわかりやすく説明された。また「雅楽道友会」の方々による楽器紹介及び合奏も行はれ、悠久の時を越えて伝へられてきた妙なる音色に、参加者一同は心安らぐ楽しい一時を過ごすことができた。

昭和音楽大学短期大学教授 國 武 忠 彦 先生



先生は、長谷川先生が昨日、指摘された、「文字のない、言葉に力をこめて生きてゐた社会を想像してください。大変な集中力の時代だった」といふ言葉を再び味はひながら、日本の古い言葉をそのまま残さうとした太安万侶の困難のさまを話された。

先生は、今回は「天の岩戸」を取り上げられて、やさしく楽しく解釈を加へながら須佐男命の荒れさぶ姿、畦あぜや溝の破壊へと読み進まれ、古代の村において、いかに畦や溝が大事なものであったか、登呂遺跡からの想像を交へて紹介された。また、天照大御神が岩戸にお隠れになつてからの闇夜と、岩戸から引き出すまでの神々の準備について、古くからの鎮魂祭たまひらのまつりの原型ではないかと指摘され、『古事記』はけつして作り話ではないことを実証していかれた。天宇受売命あめのすめのみことの踏み鳴らしたものは太鼓ではないのかと話され、ここで喜多郎のCD「古事記」

を皆で聴いた。先生は我々のいにしへの祖先たちの生活・心情を、文に即して再現されながら『古事記』は、正に日本人にとつて、「歴史」であると強調された。

講話 「若き友らへ語りかける言葉」——かまどのけぶりほそくとも——

国民文化研究会常務理事 長内俊平 先生



先生は「日本民族の文化（生き方）を決定するのは日本人としての体解（体で知る）」と信（心）解（直感的にまごころに響いて知る）を深める事であり、それらは理屈を排除する」と語られた。又「人間としての分を知る事が建国以来わが祖先たちの生き方の核心を成してゐる。我々は慎みの心を取戻すために、自分の立場で、自分の生活に即して自分の出来る事をコツコツとやっっていく事が大切」と話されて、最後に「お国言葉を中心とする美しい大和言葉を皆と共に会得して参りませう。道は近きに有りです」と話された。

## 夜の集ひ

敵しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイヤーとなった。あいにくの小雨まじりの天気ではあったが、各班ごとや大学別に楽しい出し物が続いた。合宿中の講義や出来事に題材をとりユーモラスに演じた「八俣の大蛇」をはじめとする寸劇、校歌などを高らかに歌うグループ、「鉦を納めて」の斉唱など、様々の趣向に興じ、場内は爆笑に包まれた。最後に、「進めこの道」を国民文化研究会の会員のリードで全員が唱和し、夜の集ひの楽しいひとときが閉ぢられた。

合宿を顧みて



合宿終了も間近となり、まづ、小田村四郎本会会長が、合宿初日からの各講義を順番に、丁寧に通りながら振り返られた。四泊五日を懸命に過ごした参加者にとつては、あたかも遠い昔の如くごちゃごちゃに詰まってるた記憶が次第に蘇り、はっきりした形で整理されて行くといふ貴重な時間を味はった。次に登壇した山口秀範合宿運営委員長は、合宿中、毎朝配られた「短歌の葉」の中から若山牧水の「いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ」を詠み上げられ「国文研の会員諸氏もそれぞれ忙しい仕事を何とかやり繰りし『為し難き事』を乗り越えて集まってるが、その原動力は自身の初参加時の感動に他ならない。皆さん方に多くの成果を得ていただきたいと願って、裏方の作業を続けた人々の支へによって本合宿は運営された」ことを紹介した上で、参加者からの感想発表を促された。

全体感想自由発表

続いて四泊五日を振り返って参加者が思ひのたけを発表する時間に移った。「今まで自分の心につかへてゐた疑問や不安が少し取れた」「先生方の助言や励まし、友との語りひをこれからの自分の糧としたい」「先生の話のを伺ひ、一番大事なものは「心」ではないかと気付かされ、まごころ、日本を思ふ心、心の言葉をこれから培っていきたいと思った」「単なる論争ではなく、雅楽や古典にふれ、日本といふものを深く考へることが出来た」「自分の中にもっと本が読みたい、もっと学びたいといふ気持ちがある」「文化や伝統は、懸命に守っていかうとしない限り、守られないものすごく強まったといふことに、自分自身が感動してゐる」「文化や伝統は、懸命に守っていかうとしない限り、守られない

ものだとあらためて気付いた。学生生活を自分こそは日本の文化の伝承者なのだといふ意識をもって学んでいきたい」など紹介しきれないほどの所懐がつきつきと発表され、一同感銘を新たにした。

## 閉会式

主催者を代表して本会副理事長宝辺正久氏は、先の戦争で亡くなった同信の友人達を偲ばれつつ「國のためうせにし人を思ふがなくれゆく秋の空をながめて」といふ明治天皇の御製を拝誦され、「かうした先人達の思ひを胸に合宿で学んだことを深めていつて欲しい」と挨拶された。続いて、学生代表の早稲田大学一年穴井宏明君が、「班別討論の折、小田村先生が『歴史を学ぶことは、愛情をもって学ぶことだ』と言はれ、目が醒めるやうな体験をした」と語った。最後に東京大学一年の武田有朋君が閉会を宣言し、全日程を終へた。

助言者の紹介

千代田漢方クリニック 院長

学校法人 拓殖大学 総長

(株)中央塩ビ製作所 会長

(株)千代田コンサルタント 相談役

元 法政大学 人事部長  
宗教法人 舞岡八幡宮宮司

(株)宝辺商店 取締役会長

元 佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭

元・九州造形短期大学 教授

元 浄土真宗本願寺派 沼田組光隆寺 僧侶

元・電源開発(株) 環境立地本部 本部長代理

さいたま住宅検査センター大宮事務所

昭和音楽大学短期大学部 教授

宗教法人 乃木神社宮司

新日本製鉄(株) プラント事業部 (嘱託)

川重八千代エンジニアリング(株) 担当部長

大日本園芸(株) 常務取締役

小田原城内高等学校 教諭

アサヒ飲料(株) 顧問

新潟工科大学 工学部建築学科 教授

(株)柴田 代表取締役

亜細亜大学 法学部教授

小田原市立下曾我小学校 校長

国立療養所 福岡東病院 副院長

神奈川県立厚木南高等学校 教諭

戸田建設(株) 東京支店 開発営業部開発課長

東急建設(株) 調達部部长

電源開発(株) 関東支社 支店長代理

福岡県立嘉穂高等学校 教諭

福岡県立太宰府高等学校 教諭

中島法律事務所 弁護士

関西熱化学(株) MC製造部 部長

社団法人 国民文化研究会 事務局長

湯亭こんや 代表取締役

熊本市役所 東部環境工場 場長補佐

影島興産(株) 取締役社長

伊佐ホームズ(株) 取締役社長

防衛庁契約本部

熊本県立教育センター 第二研修部主幹

防衛施設庁

山口県立下松高等学校 教諭

静岡県立焼津水産高等学校 教諭

(株)日本興業銀行 証券部 副部长

羽後信用金庫 川口支店 支店長代理

日章工業株式会社 代表取締役社長

須田 清文

小田村四郎

元 法政大学 人事部長

上村 和男

元 佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭

寶邊 正久

末次 祐司

小柳陽太郎

岡棟 猛

長内 俊平

村山 寿彦

國武 忠彦

松吉 宣和

今林 賢郁

山本 博資

磯貝 保博

原川 猛雄

坂東 一男

大岡 弘

柴田 悌輔

東中野修道

岩越 豊雄

太田 文雄

山内 健生

小柳 左門

奥富 修一

青山 直幸

小野 吉宣

植田 伸一

中島 繁樹

占部 賢志

山口 秀範

天本 和馬

折田 豊生

青砥 誠一

伊佐 裕

影島 一吉

白濱 裕

鏝 信弘

寶邊 太郎

山根 清

小柳志乃夫

菅原 亨二

藤新 成信

須田 清文

若築建設(株) 東京支店建築部 建築部長

熊本製粉(株) 住宅事業本部

主婦

(株)アルバック 超高真空事業部

アグマンド工業(株) 湯沢工場湯沢生産管理部

愛媛県保健福祉部人権対策課 主任

自営業

(株)志門塾 講師

福岡県労働局労働保険徴収課

(有)岡山商事

社団法人 国民文化研究会

日本青年協議会 学生局

中尾スタジオ

アプライドマテリアルズジャパン(株)

新聞記者

アサヒ飲料(株) マーケティング部商品企画課

主婦

(株)モノリス IE事業部

岡山県立成羽高等学校 非常勤講師

日本青年協議会

(株)日立製作所 人事企画部

池松 伸典

吉村 浩之

工藤千代子

北浜 道

眞田 博之

鳥生 秀雄

北村 公一

三林 浩行

古川 広治

岡山 英一

茅野 輝章

松岡 篤志

中尾 国博

草野 直樹

福田 仁

澤部 和道

澤部 花子

庭本秀一郎

横畑 雄基

別府 正智

伊藤 俊介

合宿運営本部

指揮班

事務局

事務班

放送・記録班

医学班

写真班

見学者

山口 秀範・寶邊矢太郎・山根 清

茅野 輝章

菅原 亨二・古川 広治・鳥生 秀雄

横畑 雄基

磯貝 保博・天本 和馬・有本和香子

香住丘高等学校英語科二年小柳 マホ

嘉穂高等学校普通科一年 小野 佑

北村 公一・岡山 英一

小柳 左門

近畿大学九州工学部一年 福岡 鉄平

(株)イセリ 代表取締役 永田 哲夫

陸上自衛隊西部方面普通科連隊 二宮 充史

主婦 桑木 悦子

# 走り書きの “感想文集”

これは閉会間ぎはの一時余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



## 第一班—男子学生—

心の中にしみわたって来るような感動

(福岡教育大学 教育 四年 小林国平)

三年前の阿蘇合宿から数えて、学生生活最後四度目の合宿となった。平易な言葉だが、本当に来て良かった。

今年も様々な先生方に御講義を頂いた。私が毎年心に残るのは、それぞれの先生方の表情であり、声、言葉からにじみ出る思いであり、感情であり、魂であるように思う。先生方がどのような話をされたか、自分にどのような知識が増えたかということも当然大事なことであるが、先生方または班友らの心の動きを感動として感じとることができるということが、一番重要なことのように思う。私は、長内先生の優しい表情、若き友らへ伝えんとする力強い声、口調、そして先生の津軽弁から伝わってくるまっすぐな言葉の一つ一つに、自分の心の中にしみわたって来るような感動を覚えた。

古事記の言の葉をよみがへらせた

(東洋大学 文 四年 牟田陽一)

長谷川先生の「文字が無い時代の言葉の力強さ」といふお言葉を胸に、國武先生の古事記のご講義をお聴きしました。

太安万侶は、國語の美しい響きに心から感動しつゝ、その神秘的な力を心から敬ひつゝ、それを文字を用ゐて表すといふ事業に真向かひました。さう思ひますと、太安万侶には、國語の誇りを自覺したフイヒテヤツルゲーネフに通じるものが感じられて、愛國者としての心情がビリビリと伝はつて来ました。「古事記」として鎮まつてゐる吾が祖國の建國の物語を告り上げた言の葉に、千数百年の時空を越えて、吾が聲と魂を以て再びいのちを与へ、隅々まで生き生きとした緊張感が張るほどの姿で、今のこの吾々の生きる世にこの言の葉を黄泉がへらせたいと思ひます。

古事記はおもしろい

(國學院大学 文 二年 竹下健太郎)

僕は、今回初めて合宿に参加しました。日本について、歴史について、先生方のご講義をお聴きしましたが、先生方の熱意がひしひしと伝わってきました。また、班別研修では、班友と和歌について語ったり、歴史について語ったり、吉田松陰の文章や古事記のおもしろさを痛切に感じ、思わず笑い出しながら勉強しました。

僕は、日本について語ることが嫌いです。愛國心というのは、心の中に秘めるものだと思つてゐるからです。また、今の時代を嘆くことも嫌いです。ですが、今の社会では、日本人としてあたりまえの行為さえ疑われています。日本人

としてあたりまえのことを身につけたので、日本人としての心を持てるように、これからも勉強していききたいです。

愉快なる神々産みしこの国に生まれしことに心はづめり

### 父に注ぐ眼指しをもって歴史を学ぶ

(早稲田大学 法 一年 穴井宏明)

占部先生は、「歴史認識と父祖の物語」の御講義の中で、星新一氏の文章を引用して「父を学ぶことが歴史を学ぶことだ」とおっしゃいました。私は、「父」と「歴史」との関連性がありにも飛躍してゐるやうに感じ、理解できませんでした。私は、班別研修の時間に私の疑問を投げかけ、班員と一緒に考えました。さうした中で、たまたまいらっしゃってゐた小田村先生が、淡々とした口調で「歴史を学ぶには愛情をもって学ぶことだ」とおっしゃいました。その時、小田村先生の「愛情」といふ言葉が、私の胸に強い衝撃を与えました。私の父は唯一の存在である。私の父の言葉や行動、優しさなどから、私は生き方を学ぶのだ。歴史上の人物に対して、父に注ぐ眼指しをもって学びなさいといふことを、占部先生はおっしゃってゐたのではないかと思ひました。

感動を伝えることのできるやう我が言霊の成熟に努めむ



開会式。主催者を代表して、(株)国民文化研究会理事長・上村和男先生が「日本の国のことを自分のこととして真剣に考へてほしい」と挨拶された。

## 一度古事記を読んでみよう

(京都在学 文 一年 荒金健太)

合宿に初めて参加したのですが、どの講義も初めて知るこ  
とばかりで、とてもためになりました。中には反発を感じる  
ところもありましたが、そこは、多くの人の意見を聞いたり、  
自分で勉強したりして、事実を確かめ、自分で納得のできる  
考えを作っていきたいと思います。

「古典に親しむ」の御講義では、國武先生の思いのこもった、  
細部まで心を配る古事記解釈に、この先生は本当に古事記が  
好きなのだなぁと思ひ、これだけ人を夢中にさせる文書とは  
どんなものかと思ひ、一度古事記を読んでみようという気にな  
りました。「雅楽への誘い」では、その独特の音楽に魅了  
されました。人のためではなく神のために作った音楽だとい  
うことも意外性があり、驚かされました。

合宿の熱のこもりし講義より事実と指針を我は見つけり

## 合宿で多くの事を学んだ

(日本体育大学 体育 一年 大竹良直)

この合宿に参加して多くの事を学んだ。知識もそうだが、  
生活面や団体行動もとても学ぶことが多かった。朝から規則  
正しい生活をして、勉強をして、つらかった。だが、とても  
充実した生活だったと思う。短歌も初めて創った。今まであ

まり頭を使わないで生活して来たため、とても新鮮な経験  
だった。友達も沢山できた。できることなら、来年以降も合  
宿に参加して、大事な友達を沢山作り、多くの事を学びたい。  
朝早く目覚めて富士を仰ぎ見ればその雄々しさに心打たるる

## 知識の無さを実感した

(早稲田大学 法 一年 小田村正彦)

初めはどうなることかと不安でしたが、先生方の御講義を  
聴いたり、班別研修で仲間達と語らううちに、少し安心した  
と同時に、自分の知識の無さを改めて実感しました。これか  
ら勉強を続け、次に討論する時には、もつと相手の言うこ  
とを理解し、それに対して自分の意見が言えるようになって  
いるように、頑張っていきたいと思ひます。

## さらに学びたい

(熊本大学 文 一年 村上洋平)

僕は、吉田松陰先生の「講孟餘話」並びに「短歌」につい  
ての御講義があると聞いていたので、それを目的に参加しま  
した。合宿で僕が学んだことを一言で言うくと、「さらに学び  
たい」ということです。各先生の御講義を聴き、まず思った  
事は、「自分はいかに知らないのか」という事であり、そこ  
から自然と「さらに学びたい」と思う心も生まれて来ました。

特に、今林先生の吉田松陰についての御講義には深い感銘を受けまして、これから自分で学んでいこうと意を固くしております。また、悪戦苦闘して短歌ができた時のうれしさは、何ともいえないものがありました。今後の生活の中でも、短歌創作というものを活かしていきたいと考えております。集ひたる友と学びし結論は学びてゆかむといふ思ひなり

この営みは絶やしてはならじ

(新日本製鐵(株)勤務(嘱託) 今林賢郁)

毎年の事だが、最終日の「全体感想発表」を聞けば、やはりこの営みは絶やしてはならぬと痛感する。一人でも多くの若き有志者を発見しなければならぬ。東京では久し振りにその芽が成長する兆しがある。全力をあげたい。

いとなみは絶やさじと思ふさはあれど越ゆべき課題もまた多かりきかにかくに重き努めと思へども若きらつながらと信じて進まむ

東京裁判の勉強が必要

(新潟工科大学教授 大岡 弘)

伊藤哲夫先生の御講義には深く感銘した。「日本人は知識が足りない。その結果、日本人としての信念がない。国力とは国民の信念の力である。国家は悪によって亡びるのではなく、愚によって亡びる」と述べられた。

カメラ・レポート2



参加学生を代表して、東京大学文学部3年・石村善之亮君が、「この合宿で感動できるもの見つけませう」と呼びかけた。

主権回復後のある時期まで、我が国は正常な国に立ち帰るべく着実に歩を進めてみたが、ある時期から異常化の道に入り込んだやうだ。それについても勉強したい。また、東京裁判について知識が足りなさすぎる。東京裁判について勉強しなければならぬことが、自分の中ではつきりして来た。

時間かけ身を込め我の遂ぐるべきことの見えきでうれしかりけり

## 第二班—男子学生—

文化の継承者として歩みたい

(京都大学 文 三年 服部源憲)

今回の合宿では文化を継承することの尊さを考へさせられました。特に長谷川先生の御講義の中でとりあげられてゐた古代において文字(漢字)が流入してきた時の話が心に残りました。無文字の世界の遺産をいかに後世に正確に伝えるかといふ文化の戦ひの跡が感じられました。その他、伊藤先生からお聞きした終戦前後における様々な先人方の主権を守る戦ひや、東儀先生からお聞きした雅楽の楽制改革のお話もこれに通じるものがあるのではないかと思ひます。我々が現代に享受してゐるあらゆる日本の文化は、守り伝へようとする日本人の強い意志力によつて育まれてきたといふ思ひが致しました。ここで思ひ起こされてくるのが古典輪読の時に読み

味はつた「講孟余話」の中に出てくる「然り而して爾あることなければ、則ち亦爾あることなからん」といふ言葉です。私もこのやうな「自分がやらねば誰がやるのだ」といふ気概を持つて、平成の御代における文化の継承者としての道を歩みたいと思ひます。

合宿を終へて

この夏も共に学びし班友の姿心に焼きつけられぬ

「同世代」の友人と共に過す事が良かった

(愛媛大学 農学研究科 修士一年 佐々木智訓)

今回初めて参加いたしました。いかに学校で習った事が自分の爲にではなく「単位取得の爲」の勉強にしかなくなつていなかったかに対して反省しております。合宿では感性を磨き、文化を味わう事に重きを置きました。数多くの先生方に御講義して頂いた事以上に全国各地から集まった「同世代」の友人との班別研修の時間を過す事が大変良かった。御講義は機会があればいつでも聞けるが、内容について議論する機会は今まで一度も無かつた(同世代の友と愛媛県にて)爲に消化不良のまま家路に就いていました。もちろん、御講義を聴き、改めて我が国日本の伝統文化の良さを学び、日本人としての誇りを強く感じる事が出来ました。感性は……勉強しなければ……。いかに仕事が忙しくとも、学業が忙しくとも、周囲の「日本欧米化傾向」に屈する事なく、我が国日本について

勉強し続け、語り継ぐ大切さを学んだ五日間でした。

合宿を終へて

日の丸の御旗をあふぐ民として我が良き文化語り継ぎたし

### 班付の先生の御言葉に衝撃を受けた

(防衛大学 人文社会 三年 徳田雄三)

今回初参加の合宿において、言葉にすることの難しい感動を覚えました。挙げ続ければどんなに用紙があっても足りなくなりそうですので、一点だけ述べます。それは短歌創作についての班付の先生（奥富先生）の御言葉でした。先生は「理屈を言う人に歌は作れない、誠実さのない人に歌は作れない」という意味の事をおっしゃいました。このお話は私に頭を殴られたような衝撃を与えました。物事をより分析的にとらえようとしすぎる余り、謙虚さも柔軟性もどこかに置き忘れていた自分に気付かされ、しばし茫然自失となりました。極めて個人的すぎる感想なのかもしれませんが、自身が様々な見えない鎖に囚われているうちは、天下国家を論ずる資格はないと思います。

合宿を終へて

まがまがしきこゝろのよろひ脱ぎ去りて故郷へ向かふけふぞうれしき

カメラ・レポート 3



オリエンテーション。合宿運営委員長の国民文化研究会事務局長・山口秀範氏から合宿趣旨説明がなされた。

## 自分を確立させるために歴史を学びたい

(九州大学 農 二年 村山賢一)

私はとても班員の方々にめぐまれたと思う。まず心に浮かぶのは徳田さんの和歌だ。亡き師の跡をつぐために、何ものもかえりみない、悲しみこもった純粹なひたむきさを感じられ、私は日頃このような姿勢で学問にのぞんでいただろうかと思われた。又、皆さんとても勉強しておられ、自分の努力不足が思われた。富士登山、和歌相互批評、夜の集いと目に見えて班の団結が強まるのがわかり、とてもうれしく思われた。特に最後の出しものはこの班よりも練習したと思われるほどの団結力だった。

私は思想というとか理屈に還元できるものと考えていた節があるので、長谷川先生のお話はとても勉強になったと思うと同時に少し拍子抜けした気がした。それはやはり私達一人一人が日本人として、日本人が経験したことを思い描いていくことが、これからの課題であるからだろう。長谷川先生はそのきっかけを与えてくれたにすぎない。しかしとても大切なことだ。大学に入るまでは、日本は敗戦によって本当のスタートが始まったように考えていた。このような歴史の認識では日本人としての自分の命の尊さがわかるはずがない。自分が生まれた戦後とは何か、自分の命は何なのか、ということを考えて実感できぬもどかしさがある。高橋史郎先生は以前「未見の我」を見つけた話をされていたが、このもど

かしさを感じるのには自分の命が長い日本の歴史の上にあると知っている未見の我がいるからだろう。なぜ自分は自分を確立させるために、歴史を学びたいと思うのか、これからも見つけていきたい。

佐々木兄へ

社会人にあれども出し物熱中し演じらるるは学生のごとし

出し物の練習にいと熱中しダダダと機関銃うつふりさるる

## 情景がよみがえってくる短歌創作

(武威工業大学 工 一年 石川光尚)

参加は初めてです。始めはとても嫌で一日目で帰りましたのですが講義がつぎつぎとはじまるにつれ、様々な疑問が生じ、班員と語り合うにつれて今までにない体験をした。富士登山のいい経験もしました。自然の厳しさ、大きさを一度で体験できるのも富士登山の魅力だと思えます。初めての短歌創作でしたが、限られた空間や字数の内での感動を表現するのはとても難しく、しかしできた時のすっきりした気持ちは何ものにも替え難い、いい体験になりました。数日後に読みかえてみるとその情景がきれいによみがえってくるのに驚きを覚えました。様々な先生に教わり、今まで世の中のステータスを得るための勉強に、心に光がさしたように感じた。今後、より一層勉学に励み、自分の国における役割というものを、自分の好きな分野でがんばっていききたい。

曇りたる我の心に一筋の光明差して晴れ渡るかな

## 勉強しようと思ったのがこの合宿での第一歩

(早稲田大学 法 一年 濱崎史嘉)

僕がこの合宿を知ったのは、大学に入って五月頃に何もかもしろくない、けど自分で何もしようとしな、と思つていた時でした。国文研塾に通つていた友達のすすめもあり、一回勉強会に出てみて、そこで山口先生と茅野先生とお話しをした時にこの合宿をすすめられたのです。パンフレットは「今の日本をおかしいというのなら、何かを変える一歩がここにある」というものでしたが、僕には今の日本を憂えるほど人間的には成長しておらず、今の自分を憂えていただけなので、今の自分に一歩成長を加えたいと思ひました。そしていざ合宿に来てみると、いきなり開会式で二回も国歌を歌い、それも皆力いっぱい歌っているのを見て、僕は驚きというか、すこし恐さを感じました。合宿の講義も自分の勉強不足がたた、先生の話を理解できず、居眠りもしばしばでした。しかし、合宿の日程が進むにつれ、一つの収穫がありました。それは全国各地から集まつてきた学生達が、とても勉強にはげんでいるという事実です。同じ班の人と話をしたり聞いたりしていると、自分が知らない本の名前や先生の名前が出てきたり、中には本の内容を暗記している人もいました。僕は彼等に尊敬の念と共に自分が悔しくなりました。そして勉強し

カメラ・レポート4



合宿導入講義。福岡県立太宰府高校教諭・占部賢志氏は『明治・父・アメリカ』の一節を紹介され、「歴史を辿っていくと星新一さんには父があつた。歴史に学ぶとはかういふことだと思ひ」と沁み沁みと話された。

ようと思ったのです。これが僕にとつてのこの合宿における一歩でした。これから夏休みが本格的に始まりますが、この一歩をどんだん二歩三歩と増やしていき、自分の人生を悔いなく精進していこうと思います。

富士の場で厳しき日程終えた今新たな歩みを始めたかと思ふ

### 相手の心の中に踏み込んで付き合つてほしい

(東急建設 奥富修一)

班員の皆さん有難う。短い期間でしたが君達と一緒にゐる時間を持てたことを心から嬉しく思ひます。まだまだ語り合へた事もあつたかもしれませんが、次に逢ふときの楽しみにしておきませう。欲を言へば諸君同士はもつと相手の心の中に踏み込んで付き合つてほしかった。佐々木君の感想文にあるやうに同世代の友と議論することが少ない時代だから余計にさう思ひます。本音で話すことが少ない——これは皆さんだけではない、私の職場でもさうだ。議論の行きつく果ては互に相手を信ずることができるとか、その信の力を持つるかどうか、和歌を詠むことのできる人にはこの力があると思ひます。いづれにしても私も濱崎君のやうに自分の居場所から一歩を踏み出します。

わが子より若き友らと語りゆけば身内に熱き思ひ湧き来も

### 第三班 男子学生

「勉強したい」という気持ちが強く湧いてきた

(東京大学 文I 武田有朋)

「学問に感動する」ということをこの合宿で初めて実感できたように思います。確かにこれまででも多くのことを学び、知識はもつていたのですが、知識はそれ以上のものにはならなかつたような気がします。その点、この合宿で学んだことは「体温」とでも言うべきものでした。古典の行間から、先人達の想いを汲み取つて、頭だけでなく心にもその想いを浸み込ませていくといった勉強はほとんどしたことがなかつたので、非常に新鮮な気持ちで日程に取り組めました。また驚いたことに「もつと勉強したい」という気持ちが自然に、そして強く湧いてきたことです。これが本当の学問なのでしょうか。感動を求め、それを糧に自らを鍛えていくことが学問なのだと思感しました。

友人を得たことも収穫でした。ごく素直に自然に、社会問題や勉強、さらには自分の胸の内の全てを語り合える友が普段の生活で何人いるでしょうか。ここで得た友は本当に大切なものになりそうな気がします。オールドの先生方の深い友情を拝見しても、ここで芽生えた友情が本物であり、ずっと続いていくものだといいことが分かるのではないのでしょうか。

来年の合宿教室で、どんな人と出会い何を学べるか今から楽しみでなりません。

富士のもとに新たに結びし友情を胸に抱きて生きて行きたし

「信解」というお言葉にハッとさせられた！

（早稲田大学 社会科学研究所 修士一年 松下文彦）

普段の学生生活では、しみじみと言葉を味わったり生き方を問うたりする場がなく、それを求めて合宿に臨みました。なかでも長内俊平先生の御講話がことに印象的でした。物事の理解の仕方には「頭で分かる知解」「体で感じる体解」「心の目でみる信解」の違いがあるとお言葉にハッとさせられました。私自身もやもすると「知解」に留まりがちで、何となく心が満たされないことが往々としてありました。自分が等閑してきたのは「信解」であったと思いました。

長谷川三千子先生の御講義で「古事記」編纂時、漢字を取り入れつつも国語の音を残して今日の日本語を確立していったこと、また東儀俊美先生の御講話では中国朝鮮の楽舞を受け入れつつも九世紀後半の「楽制改革」によって現在まで雅楽が伝えられているとお話をお聴きして、日本文化に対する確信が深められたように思います。これからは「信解」に力点を置いて、日々の学びに努めて参りたいと思います。

長内俊平先生の御講話を聴きて

心眼で物を見よとの先生の教へを体し学びゆかなむ

カメラ・レポート5



朝の集い。「青年の家」を利用してゐる他の団体と共に、国旗掲揚を行ひ体操をして一日の研修が始まる。

これまでとは明らかに違った気持ちを味わった

(西南学院大学 法 一年 春木寿潤)

初めての参加でとても緊張して御殿場に來ました。しかし講義を聴講して行くにつれて惹かれて行き、とても興味深くおもしろかったです。この合宿では、まず自分自身を見直すことになったように思います。同時に本当の「学問とは何か」ということで疑問が湧いて來ました。一番の大きな収穫は、心の中から勉強しようという気持ちになれたことです。これまでとは明らかに違った気持ちを、この合宿で味わうことができました。そして自分が日本人として生まれたことを誇りに感じます。先人の偉業のお話をお聞きすると、自分にもそういう熱い日本人の血が流れていると思われて感動しました。将来、外国に行く機会があれば胸を張って日本人として堂々と自国の歴史を語れるようになりたいと思いました。今のこの気持ちを大切に、いろいろな本を読んだり視野を広げていきたいと思っています。そうすることで自分を磨くことが出来たら最高だと思えます。

学ぶことの初めて楽しく思はれてわが胸内に兆すものあり  
いま生くる我が身の中にも先人の熱き血潮の流るるを覚ゆ

守り継いで行かなければならないものがある

(早稲田大学 政治経済 一年 佐藤秀平)

高校時代に柔道部に属していましたが、国内の柔道の試合でも国際ルールで判定が下されるようになったり、国際大会では競技の合理性の前にカラー柔道着が採用されるなど、私には日本の伝統観念が否定された感じがしました。「白」は純潔を表すとした日本の主張は全く無視されました。

その時から私には「合理性をとやかく言う前に、守り継いで行かなくてはならない観念があるのではないか、そういうものを軽視して良いのか」という思いが残っていました。そんな私に私よりも知識も教養もある諸先生方が、そういうことを講義して下さって私は「そう、そう、そうなんですよ」と何度も心の中で叫んでしまいました。日頃から、他人と接する前に己れを知っておくべしと考えていた私でしたが、国際化を考える前に自分の国の持つ財産について何も知らなかったことは私にとつて衝撃であり、また恥ずかしい思いでした。ぜひ日本が持つ文化・伝統を学んでいこうと強く感じました。喜多郎の「CD古事記」は名曲で、帰りにCD屋にダッシュします。

日の本を支ふるために研鑽の日々を重ねて学び行きたし

国のためと励むみ友の姿みて負けてはならじと切に思へり

国のさまを憂へもて説く友をみて新聞も読まざる我が身を恥ぢたり

## 心の底から驚いたり感動できた

(岡山理科大学 総合情報 一年 秋山 博)

今回の合宿で得たものは、日本について知らなかった様々のことについて知ることができたことである。それ以上に良かったことは、講義を聞いて知識として取り入れる前に感じることができたり、心の底から驚いたり感動できたことである。知識として得たものは、いつか忘れてしまう。しかし、自らの心によって得たものは決して失うことはなく、何時までも自分の中に残っていると思う。その時代を生きた人々は、どのようなことを思い、どう考えていたのだろうか、その人の立場になって考える。そのことが班別研修や短歌相互批評でも、相手の気持ちに限りなく近づこうとするとところに生かされていたと思う。

やはりもつとも大切なことは、自国がどのようなもので、どんな歴史を歩んできたのかを正確に知り伝えて行くことだと思う。そうでなければ「日本」という国名は単なる商品名となってしまうって中身の無いものとなる。そんなことが決してあってはならない。

いつの日か合宿のことを思ひ出し振り返る時の必ずや来るらむ

全体感想自由発表にて

壇上で熱く語りし我が友のかがやくみ顔にこころ奪はる



二日目午前、日本政策研究センター所長・伊藤哲夫先生はポツダム宣言について「この文章の背後に、私たちの父祖の血みどろの敢闘が読み取れない歴史などは嘘です」と切々と訴へられた。

## 日常不断の覚悟と決意を要する文化の継承

(同志社大学 法 三年 石井一賢)

小柳陽太郎先生は「教室から消えた「物を見る目」「歴史を見る目」」の中で、占領政策が「国のいのちそのものを断ちきる」峻烈苛酷なものであったとの御指摘に続いて、「だがいかに占領政策が苛酷なものであったとはいえ、どうして日本民族があの当時、それをはねかえすだけの力がなかったのかを今の時点できちんと反省しなくてはならない」と書かれていた。この点について、班別研修に來られた宝辺正久先生に「戦前において天皇の御歌をじっくりとお偲びすることがあったと思うが、どうしてそのようなことになったのか」をお聞きした。すると宝辺先生は「例えば学校で明治天皇の御製を拜誦するけれども、教師達も教訓として教条的に教えるのみで、教えられる学生も『またか!』という気持ちでしかなく、天皇のお気持ちを概括的にとらえるだけであった。文学的に味わうということがなかった」と言われた。「短歌創作で富士山を雄大だと詠むが、それは富士山を概括的に捉えたもので、富士山を見た時の動いてやまない心をそのまま言葉に表現したのではないんだ」とも言われた。

このお話をお聞きして、私は身を正される思いがした。自分分は安易に戦前のどこに問題があるかを教えてもらって、それを克服すればよいと考えていたが、問題は自分の心の中にあるということに気づいたからだ。私達はえてして天皇は国

民を思われていると概括的に捉え、お心のさゆらぎにいたるまでじっくりと味わおうとしない。安易に文化を継承するか思想を深めるとかいうが、これは大変に難しいことであり、私達が不断に心を鍛えていくこと、自分自身を縛っている心を解き放していくこと、その営みの中にしか文化を守る継承をすることはありえないのだと実感した。小林秀雄さんの、思想とは頭で考え出されたものではなく、思い描くこと先人の思いを追体験していくことだとのお言葉がよみがえってきた。

これからの文化を継承する学問には、私達の日常不断の努力を要し、これには非常なる覚悟と決意が要ることを実感した次第である。

全体感想自由発表にて社会人女性の発言を聞きて

心から言葉を交はし語り合ふ友との出会ひうれしと語る  
とぎれがちながらも胸内切々と涙ながらに語る君はも

心の奥深くに潜んでいた感情が呼び起こされた

(亜細亜大学 国際関係 二年 大橋広和)

二回目に参加でしたが、ここには大学では学べないものが数多くありました。それは単に知識だけではないもので、感動をともしなれた、自分の頭を使って想像力を働かせなければならぬものでした。以前の私は「感動」という言葉に胡散臭さを覚えていました。それは昨今のテレビなどで安っぽ

い感動を売りにした番組が多くあるからです。この合宿では自分の心の奥深くに潜んでいた感情が呼び起こされました。これは決して誇大に言っているのではなく偽らざる気持ちです。

合宿が終わっても、ここで培った勉学の意欲を持ち続けることが私にとって残された最重要課題であります。

富士の地で開かれし集ひに参加して我学問せんと強く決意す

先人の思ひに迫る学問をせねばならない

(神奈川県立厚木南高校教諭 山内健生)

四泊五日がとても長く感じられた。閉会式の御挨拶の中で小田村寅二郎先生がいつも仰言つてゐた「開会式がはるか以前のことのやうに感じられませんか。それはここで普段の数倍数十倍の勉強をし心を働かせたからです」云々のお言葉を想ひおこしてゐる。やはりそれだけ心を労したのでらうか。班別研修を共にした学生の取り組み姿勢はいつも前向きで、新鮮な刺激を与へてくれた。ありがたいことであつた。

伊藤哲夫先生は「国家は悪で滅びるのではなく愚によって滅びる」と何度も言はれた。「先人の国を思ふ心を一顧だにしない学問など愚の最たるものだ。本当の学問をしなければならぬ。先人の思ひを受け継ごうとしないのは馬鹿です」とまで言はれた。たしかに学ぶべきを学ばず大きな顔してゐるのは本来恥かしいことなのだと思つてつよく感じた。尻を



伊藤先生をお囲みして熱心な質疑応答が行はれた。

たたかれた思ひがする。諸講義を通して、国の根っ子の大切さとその価値が説かれたが、若い学生諸君も「よし、しつかりと勉強するぞ」との決意を固めてくれたものと思ふ。

合宿の閉会せまればあらたなる深き力のわきくる覚ゆ

平生の怠けがちなる己が身の思はれてならず今のこの時

己が身を己の手にて鞭打ちてつづくひととせ日々につとめん

みづからの手にてわが身を律するはさぞ難かるもつとめざらなん

#### 第四班——男子学生——

自分の物の考え方を根本から見つめ直したい

(成蹊大学 法 一年 水野弘幸)

今回の合宿は自分にとつては始めての参加でした。大学一年ということもあり、自分の見識を広げようと参加したのですが、正直な話かなりの衝撃をうけました。

それは自分の無知識です。班の人達の会話についていけない自分に、今まで何を勉強してきたのかと疑いました。思えば今までは、表面の浅い所ばかりで、奥深くにある本質を考えたことはあまりなかったように思います。例えば「天皇」を考える時、「なぜ我々は天皇を尊ぶのか」という深い考えはできませんでした。長内先生がおっしゃられたように「知解」に走っていた自分を痛感し、「信解」というものを本当

に感じられるよう、自分の物の考え方を根本から見つめ直したいと思います。

日の丸を掲げて歌ふ君が代に先人たちの思ひを尊ぶ

富士の地に集まり我と友達は熱き思ひを胸に秘めたり

今まで以上に日本を好きになれた

(大阪大学 理 一年 有井宏敏)

この度初めてこの合宿に参加して、非常に良かったと思います。最も嬉しいのは、こんなにたくさんの方の、日本が大好きな先生や友達がいらつしやるということ、そして僕自身、今まで以上に日本を好きになれたということです。

大学に入って親元から離れ、より社会に触れる機会が増えたため、これまで興味のなかった政治、経済に目を向けるようになりました。また本を読む時間が増え、和歌や古文のことをもっと知りたいと思うようになりました。そして、小泉首相の靖国参拝問題、戦争について、さらには天皇という御存在について、どのように考え申し上げれば良いのかなども考えるようになりました。この合宿では、そのようなことについて解決の糸口を見つけるとともに、更なる勉強への触発をも与えて頂きました。そしてなによりも古事記というものがこれほどまでにおもしろく、興味深いと知れたことが喜ばしく思えます。御講義の中で、当時使われていた言葉が今の我々にもわかるということへの驚きを教わったとき、そして

それを自身でかみしめたとき、つくづくこれまで日本語を大切にしてくられた先人たちへの感謝の念を感じました。

皆のまだ起きてこぬ間に読書せり霧雨の降る美しき朝

国武先生の御講義を受けて

古に使はれたりし言の葉のけふの我らに伝はるうれしも

小野先生の御講義の後で

天皇の国民おもふ御心のまことに尊きものかなと知る

縁ありて富士のみ山に集ひして学びしことを我は忘れじ

人の気持ちにどれだけ近づけるかが短歌である

(北海学園大学 経済 二年 加納祐己)

ここに来た当初は、まわりの人とうち解けられるか不安だったが、うちとけるのに長い時間はかからなかった。それは短歌相互批評の時間があつたからである。

正直言って合宿に来る前は、短歌以外の歴史などの講義にしか興味がなかったが、この合宿教室を終えてみて、短歌が一番おもしろかった。班別相互批評で或る人が、自分の感じたことをうまく表現できなくて、できるだけ彼の感じたことをそのまま表現できる歌を皆で苦心して考え、そしてとうとう彼の感じにピッタリの歌を完成した。その瞬間彼の顔からは、自分の気持ちを表せた満足感があらわれていた。その時ばかりは、一つの達成感と感動を覚えた。

短歌は文法ガチガチで修辭的なものに終始し、歌の創作に



羽後信用金庫勤務・須田清文先生による短歌創作導入講義。先生は恩師であられる夜久正雄先生が運動会での乙女を詠まれた歌を紹介され、感動を短歌で表現する素晴らしさを語られた。

熟練した人が無理矢理直したりするものだと思っていたが、みんなでその人の気持ちにどれだけ近づけるかが短歌だと思つた。

感想発表表において

ある人の涙流しつ述ぶることに共感覚ゆ抱きて帰らむ

“信解”しようと思がけたい

(明星大学 人文 三年 久田広光)

長内先生は、「“信解”とは清らかな涙を流すことにより、心につもつた“ちり”を洗い流すことである」と語られました。私はそれまでの自分の心の寄せ方にハッとさせられました。私は、友や先生が感動の涙を流されていても、自分にはそこまで感動できないと、一歩引いて見ておりました。先生は、「感動とは自我一体を感じた時に起こる」とも言われました。私自身お父さんお母さんの有り難さを感じた時、日本を命がけて護られた先人の姿に涙を流した時が思い起こされました。自分も感動できると思うと、うれしさと共に自分の中で自分を押し込めていたものから解放されていく感じがしました。今後は学問や先人や先生方、友に対して“信解”をしようと思がけたいと思います。

先人と共に生きる学びをしたい

(佐賀大学 理工 三年 片岡正憲)

今回の合宿で心に残つたのは伊藤先生の講義で指摘された『ポツダム宣言』の読み方であつた。「この文章の中に先人達の命がけの努力の結晶が込められている。それを読みとれない歴史なんてうそだ」との御言葉が胸に迫つた。又「志とは先人達の思いをうらぎらない覚悟だ」という御言葉に、自分は志とは自分ができる最良の職や活動をなしてあげていくのだと思つていたが、自分が先人に対して本当に心をよせていたのかを思わされると同時に、先人達と共に生きることができる学びをしてゆきたいと思つた。先人達の言葉一言一句にこめられている先人の命を、生き様を思い描くことができるように、和歌や歴史の学びを積み重ねていきたいと思う。先人の文より御心偲ばむと敷島の道さらに学ばむ

貴重な体験をした

(慶応義塾大学 法 四年 伊藤哲郎)

学生生活最後の年に、偶々機縁を得てこの合宿に参加できたのは非常な幸運でした。富士のすそ野の大自然の中で、同じ年代の仲間と語り合い共に生活するのはとても楽しいことでした。そこには新たな出会いがあり、新たな友情を育むこ

とができました。こういった機会を与えて下さったあらゆるものに感謝したいです。

研修では、歴史、思想、文化など種々なテーマが扱われました。しかし私その全てを通して一貫して思ったのは、ものごとは「心の眼」で「見」なければならぬということ。 「心の眼」を磨くためには、日本人としては日本文化を体験するのが一番だと思います。その意味で今回初めて短歌創作をしたり、雅楽を聴けたのは非常に貴重な体験でした。先人の御魂集ひし富士山で師らの語りし思ひ忘れじ

### 「心で感じる」ことを学んだ

（神戸大学 国際文化 四年 北村幸一）

今回の合宿で私が学んだことは「心で感じる」ことである。慰霊祭の後の班別懇談会の際、訳もなく涙があふれてきた。涙が出る状況は、何かくやしき時、うれしき時、自分ががんばった後、感動した時などこれまでの生活の中でも何度かあったが、今回の様な感情は初めてだった。長内先生が「世の中には頭で考えてもわかんねえことがある」とおっしゃった。私が班別懇談で感じたこともそれなんだらう。物事は、論理的に考えることで、かえって逆に何か大切なものが見えなくなることも多いと思う。論理的にはわからないが素直な心で自分の感じるものがある時は、それを信じて謙虚さを忘れずにかつ大胆不敵に日々生活していきたいと思う。



レクリエーション。待望の富士登山。元気良く出発。

## “言葉に力を込めてゐた時代”

(日本青年協議会 松岡篤志)

「文字のない社会では、言葉に力をこめてゐた。」長谷川先生がこの言葉が強く心に刻まれた合宿であった。ありがたいことに、本居官長のお陰で、私達も古事記の世界に触れることができる。官長が古事記にこめられた古代人の世界に参入していったやうに、“言葉に力をこめてゐた時代”を豊かによみがへらせようとする。こそ、ここに集まった我らの責務である。

首相の靖国神社参拝は、死者と共に生きてきた日本人の美しい文化伝統を甦らせる第一歩とならう。長内先生が紹介された宮本武蔵の言葉「観の目強く、見の目弱く」を心に刻み、文化防衛の戦士として互ひに磨きあつてゆきたい。

## “言葉に力を籠めてゐた”時代に近づきたい

(株アルバック 北浜 道)

長谷川先生の御講義を伺つていろいろ考へさせられた。

文字無き代の人々にとつて、人と言葉を交し合ふ事、神々の物語を語り合ひ、語り継ぐ事、そして“言葉に力を籠めて生きる事、とは、一体どういふ体験だったのだからうか。

『古事記』『万葉集』を読むと、当時の人々にとつて、神々の物語の世界が身近であつた様が偲ばれる。又その言葉の簡

素な力強さに打たれる。そしてさうした力強い言葉が、今も残されてゐてそれを読める事にうれしさを覚える。習熟することで、その心に近付く事が可能と思はれるからである。

長谷川先生の御話して受けた印象を暖めつつ『古事記』や『万葉集』を読んでいきたいと思つてゐる。

班の皆へ

これからも便りを交はしむるともに学びの道が続けゆかなむ

## 第五班—男子学生—

### 文化・歴史の追体験こそが日本思想

(京都大学 工 一年 宮崎明彦)

講義の中で自分が最も感銘を受けたのは長谷川先生の「日本思想」のお話でした。僕は日本の思想を西洋のもの差して測るといふやり方に大きな疑問をもつていたのですが、それでは日本の思想とは何なのだという事を考えたとき、全く暗中模索でした。それについて長谷川先生は、無文字の文化という自分の思ひもつかなかつた視点から切り込まれ、思い描く事、無文字の社会の文字による伝承、その文化の追体験をする事が日本の思想そのものであるとおっしゃられました。この講義で新たな道が開けた様な気がします。

合宿で輝く友のまなこ見て我も持たむと思ひたりけり

## 学生の学生たる所以

(東京大学 文Ⅲ 二年 石村善之亮)

諸先生方の講義からひしひしと伝わってくるのは、先人たちの思いを我々が知り、受け継いでいくこと、そしてこの国のすがたを知り、守ろうとすること、こういうことでした。自分は今、大学生なので、学生の学生たる所以ということで、学費を出してもらっている親に感謝すること、このことをいつも頭のすみにおいて、忘れないようにしたいものです。合宿が終わってからの課題も見つけました。「天皇とは？」というのをこれからの課題にしていきたいと思っています。最後に、合宿に初めて来たという人と多数知り合えたのは望外のことでした。感謝しています。

国のため命捧げし先人の思ひ偲びついかで継ぐべき

## 「体解」「信解」を得た四泊五日間

(立命館大学 経営 三年 山田篤史)

私は、二十二年弱生きてきて、様々な「情報」に触れてきました。今日まで生きてきて、得てきた「情報」は、その多くが「知解」によるものだったと思います。しかし、よく振り返ってみれば、私の将来の方向性を決定する契機にあった「情報」は、やはり「体解」「信解」によるものであったと、長内先生の講義を拝聴し、思い至りました。



レクリエーション。はいチーズ。

今回たつた四泊五日であるのに十年以上もこの場にいないのではないかという不思議な空気の懐しさでした。その理由をよくよく考えてみると、長内先生の講義と関係するのですが、一年の内、一回あるかないかという「体解」「信解」による「情報」を四泊五日の間で一時間に一度という位の割合で得ることができたためです。

合宿を振り返へり

みじかしも百も得られし「信解の知」更に得んぞと誓ひ立てにき

## 日本語を守つた大事業

(長崎大学 教育 三年 廣中 渉)

日本人とはこういうものだと思ふのではなく、先人の姿を思い描き、追体験し、感得して行くものなのだ、長内先生が、母親を概念で説明できるものではないとおっしゃつたことから考えさせられた。多くのことを知ることよりも、いかに強くイメージし、追体験の中で心を揺り動かす物語として行くことが大事なのだと思う。また古事記の成立過程においては、漢字文字の渡来でそのまま中国語文化になる可能性も十分にあったということを知り、やまとことばをうしなわないように漢字を音と訓とに分けて日本語に表記していったという、その苦労は計り知れないものであり、日本語を守つた大事業であつたことを知ることができました。

古事記成立に触れて

いにしへゆ伝はるやまとのことばにて国のいのちは守られ来しか

「ことば」をそのままに味わうことのできる喜び

(島根大学 医 四年 江頭一成)

最初に感じたのは、文章が歴史的仮名遣いで書かれていたことへの抵抗でした。現在でもこのような仮名遣いを用いることに違和感を感じました。しかし今回の合宿を通し、現代の仮名遣いは戦後に便利性を目的に「改造された」ものであり、古来、話し言葉を守つてきた日本人の連綿性に傷をつけるものではないかと考えるようになりました。短歌においてもそうです。短歌とは「古くさいもの」ではなく我々の祖先が受け継いできた「日本の心」なのだと思ふようになりました。私も昔の、それも千年以上前の人々が心を込めて使つてきた「ことば」をそのままに味わうことのできるよろこびに触れた気がしました。

富士の野で得たる思ひを保ちつつ今日も歩みぬ土踏みしめて

## 第六班―男子学生―

「周りに支えられて生きています」

（亜細亜大学 国際関係 二年 野村亮）

私は、この合宿で多くのことを教えられ、また確認しました。七月まで五ヶ月間アメリカに留学しておりました。またそこでも多くのことを教えられたのですが、その一つに「周りに支えられて生きています」ということでした。このことは母に留学中教えられました。先人・家族・親類、これらは身近な存在であり、物理的にも支援されていることから、理解し、本当に自分が生まれてくれたことを感謝しておりました。しかし母は自分が生きているその場面に居合わせている人々にも支えられていると言いました。留学中は頭で理解しているだけで本当はよくわかりませんでした。

この合宿を通じて自分は確認、いや確信しました。「自分は多くの周りの人々に支えられている」と。今回合宿で友と議論し、教えられ、そしてそれによって「よしやるぞ!」と決心する。また一緒に笑い苦しむ。私が真剣に生き抜いていくための多くの糧を私はいただきました。友人だけではなく、目に見えない所でこの合宿のためご尽力された方々や各先生方、参加者の近くで教えられた先生方など本当に有難うございました。



二日目の夜。「吉田松陰『講孟余話』」と題して新日本製鐵(株)嘱託・今林賢郁先生による輪読導入講義が行はれた。先生は「松陰は最期まで誠を尽くした武士です。彼は文学者ではないが、その文章は質実明快です」と述べられ、文章の躍動のままに生き生きと松陰を偲んでゆかれた。

心から日の本の國を思ふたび思ひ浮かぶは父母の顔

山口秀範氏のお話をお聴きして

合宿はまさに先人連綿と営んできた証と感ず

感想を聴きて

感想を述ぶる人らの言の葉に先人たちの魂生きづく

新たなる決意を胸に飛びださむ多くの学徒に我もつづかむ

### 心持ちを持つことの難しさ

(東北大学 教育学研究科 博士一年 大岡一巨)

スケジュールが過密だという声をそここで聞いた。しかし、私はゆとりを感じられたように思う。それは班別研修の時間があつたからだと思う。その日その日の講義内容を検討する時間は大学では持たれない。大学では討論の時間もたれたとしても、メンバーそれぞれが自分の知識を披露するだけで終わってしまい、ひとつの内容を日を置かずに消化するということが行われないのである。

班別研修の中でも最も実になつたのは、短歌の相互批評であつた。歌を作ることの難しさは、技術的な難しさではなく、その心持ちを持つことの難しさであつた。特攻隊員たちの尊さは戦争に参加したから尊いのではなく、彼らの持ちえた心持ちの故に尊いのだと思う。歌を作ることを経験して、班別相互批評を経験して、散る人々の心持ちを持つことの難しさに思い至つたことは得難い経験であつた。班の仲間にも深く

感謝する。

岩越先生のプリントを見返して

合宿のプリントをあとで見返せば温厚なる師の顔思い出される  
わが班の夜のつどいの出しもので友らの底力声にはらはる

### 自分への自信と誇りを取りもどす事ができた

(筑波大学 地域研究科 修士一年 寺澤知之)

今回この合宿は私にとつて初めての参加という事もあり、感激、驚き、興奮のため、よく整理がついてないというのが率直な感想です。合宿のパンフレットにある「今の日本はおかしいというなら何かを変える一歩がここにある」に目が止まり、合宿への参加を決意しました。同じことを私も常日頃感じていましたが、その答えを見つけられず、不安と絶望の日々を送っていたからです。

しかし今回この合宿に参加し、先生方の真心のこもつた御高説や知らなかつた日本の歴史、友の熱き語りを聞くにつれ、モヤモヤしていた気持ちはいつしか消え、自分への自信と誇りを取りもどす事が出来たような気がしました。四泊五日の合宿はあつという間に終わってしまったのですが、私達の本当の出發はここから始まるのだと思います。これからも今のこのゆるがぬ決意と信念を忘れず、勉学にいそしみ、精進してまいりたいと思います。またこのような機会を与えて下さつた国文研の先輩方、先生方、友人達に心から感謝します。

富士山に雨降らぬ事いのる師の真心知りて吾は涙す  
若人の熱き語りに吾忘れ夜も忘れて空は白みぬ  
心血を注いで作られし憲法の重きを知りて先人おもふ

非常に多くの刺激をうけた

(早稲田大学 法 一年 高木雅史)

この合宿は、毎日驚きの連続でした。

講義の内容は、非常に得るものも多かったのですが、同時に抵抗を感じる内容もありました。

また班別研修では、あのように皆で自分の意見を言い合うという形での勉強は、自分にとってはじめてでとても新鮮に感じました。

自分と同年代の学生で、こんなに勉強していて、こんなに考えている人間がいるということも大きな発見の一つでした。

この合宿では、非常に多くの刺激をうけ、また考えるきっかけもたくさんいただきました。ありがとうございました。

班別研修にて東中野先生のお歌をお聞きして

才能のなしやと嘆く先生に学問の道の厳しさを知る



三日目午前、埼玉大学教授・長谷川三子先生は「日本の思想」と題して同名の丸山真男氏の論文に触れ、「私達には思想といふものに既に偏見があるのです。さうでない、私達の祖先が元々持っていた思想を、純粹に日本人の目で発見したのが本居宣長でした。それは、切実に思ひ描く、追体験をするといふ事でした」と指摘された。

## 日本という国についてもっと勉強したい

(神戸大学 文 三年 井上智史)

私は今年の冬から就職活動が始まるのですが、今からその準備をしています。その中に自己を振り返る自己分析があるのですが、私は他人に自分はこういう人間だといえるものがないように思っていました。この合宿でたくさん講師の貴重な講義を聞いて、確固とした信念を作るきっかけができたと思いました。また、たくさんさんの友が真剣に講義を聞く姿勢として豊富な知識を目のあたりにして、自分の勉強・学問に対する姿勢、知識の貧困さを痛感しました。そしてその知識というの、私が日本国民であるということにとつてかけがえのない大事な知識だと思えます。

講義の中で特に感激したのは伊藤先生の話でした。日本は原爆という力によって負かされたのではなく、先人たちの尊い犠牲があつて、今の日本が存在しているということを知った時は胸が熱くなりました。そんな先人たちのことを考える感謝の気持ちがあふれてきて、自分が日本人であることに誇りを持ってました。

今、日本は本当に正しいことは何かということも主張できず、日本人であるというアイデンティティがあやぶまれる危機であると思います。

私はこれから、この偉大な先人たちの努力を無駄にしないように日本という国についてもっと勉強したいと思いました。

## 松陰の不屈の精神

(新聞記者 福田 仁)

自らの「志」を見つめ直すこと、父親として子供に何をどう「伝へる」か、四度目の参加となった今回の合宿には、この二点をテーマに臨みました。

前者については松陰の不屈の精神に、後者は講義全般を通じて教へられるところ大でした。

第六班のはつらつとした学生諸君からも大いに刺激を受け、おのれの力量不足を反省しつつ、楽しい五日間を過ごせたことに感謝してゐます。

学生の皆さんがここで得た火を絶やさず、再び合宿に参加されることを願つてやみません。

志説く松陰の言の葉を読めば勇氣の湧き出づるかな  
をちこちゆ集ひし友と寝食を共にし学ぶことの楽しさ

東中野先生のご指導をいただく

若きらとひざを交へて師の君の語るみ言葉胸にしみたり

## 先人の思ひを「思ひ描く」やう心掛けたい

(早稲田大学 社会科学学研究科 修士一年 星原大輔)

今回ひさしぶりに松陰先生の文章に触れることができた。

その中に「世に讀書人多くして眞の學者なきものは學を爲すの初め、その志已に誤ればなり」とあった。研究者として將

來生きていかうと思ふ者としては強く心に残った。己の志は何かと自問せずにはいられなかった。

伊藤先生から貴重な話を聞かせて戴いた。帝國憲法の改正決議をした折り、議場にはしばしの静寂の後、嗚咽がこぼれたといふ。その場にゐた議員たちのくやしさは如何ばかりであつたであらうか。私の研究テーマは帝國憲法の制定に携はつた井上毅である。帝國憲法の最後の瞬間がこのやうなものであつたことは知らなかつた。それだけに強く心に残つた。制定、施行、改正までの間如何に先人たちがこの憲法を大切にしてきたのかが感じられた。

ややもすれば院における生活は「知解」に陥りがちであり、「あやふさ」と隣合わせである。研究に取り組む上ではかうした先人の思ひを「思ひ描く」やう心掛け、こころを働かせたいと思ふ。松陰先生の文章に「而して其の規模は今日に在るなり」とある。正にこの覺悟で一日一日がんばつていきたいと思ふ。

#### 第六班の班長として

班運営なかなかうまく進められずいたらぬ我をはがゆく思ふ  
さはあれと思ひしことをそのまゝに語る友らに助けられけり

この班でよかりきといひ歸りゆく友の言の葉をうれしく聞きぬ



野外炊飯。なにができるのかなー。

## 第十一班—女子学生—

言葉を知らないということの「くやしさ」

(福岡女子大学 文 一年 黒岩礼子)

合宿の中で多くの先生方のお話しを聞いていく中で、自分の知らない言葉が山ほど出てきました。「こんなに自分は言葉を知らないのか」と自分が大変情なく思えました。そしてその中に「くやしさ」も感じました。それは、短歌を作るとき、また、自分の歌を班員と先生方に批評していただいた時にも感じました。

短歌は、自分の気持ちをそのまま表現することが大事なのだ、と教えていただきましたが、言葉を知らないということが私の弱点だと思いました。言葉を知らないと本当の自分の気持ちをそのまま歌に表わすことができず、なんともつまらない歌になってしまうということを深く感じました。この「くやしさ」を決して忘れずに、これから努力していきます。

短歌創作および短歌相互批評の折に

感じたる心そのまま描かむと求むる言葉の出でこずくやしき

自分を大きく変える第一歩

(東北女子大学 家政 二年 山崎多佳子)

合宿が始まり、講義を聞いて班別研修をする中で、私は、今まで学校で学んできたことが全く身に付いていないことに気付かされました。また、自分は今まで、いかに何も考えずに生きていたか、と痛いほど感じました。

そして、講義を聞いているうちに、日本というものをもっと知りたい、と思うようになりました。特に、日本の学問、そして精神の根本である『古事記』をもっと深く学びたい、と思いました。そう思っている自分に、今、とても感動しています。

今回の、この合宿が、これからの自分を大きく変える第一歩となり、とてもうれしく思います。

より深く学びゆきたしすばらしき心あふるる日本の歴史を

子供たちの安心できる家庭が何より大事である

(岡山大学 法 二年 野上哲子)

この合宿に実際に参加してみると、スケジュールがびっしりつまっていて、自分が日頃どれだけ怠けていたかが分りました。また、講義の内容と私が学校で聴いたことが違う場面がしばしばありました。これから、もっと色々な意見について、自分の中でじっくり考えたいと思います。

私が一番興味を持ったのは工藤先生の体験発表でした。いじめや学級崩壊を防ぐためには、子供の情緒を安定させることが大切であり、今の世の中にはびこっている「金銭的裕福が大事である」という風潮を、「子供たちの安心できる家庭が何より大事である」という風潮に変えていかなければならない、ということを実感しました。

今友と別れゆけども新たな道をもとめてつとめゆきたし

自然と胸が熱くなり涙が出そうになりました

(東北女子短期大学 生活 二年 竹田紗耶香)

今まで歴史や古事記などについて深く勉強したことがなく講義内容を理解するのも難しく、班別研修の時は周りの方の話を聞いて自分の知識のなさを痛感しました。そして、先生方や先輩方の話を聞くことで、日本のこと、戦争のこと、古事記のことをもっと知りたい、本を読みたいと思うようになりました。この合宿は今までの自分を変える良い機会になったように思います。そして全国各地の世代を越えた方々と共に学び、語り、楽しく充実した日を過ごすことができましたことをうれしく思います。

最後の全体自由感想発表の時に、様々な方々の様々な思いを聞きながら合宿をふり返った時に、自然と胸が熱くなり、涙が出そうになりました。私にとっては、これが第一歩のスタートとなるので、歩みを止めることなく進んでいきたいと



野外炊飯。長谷川先生も一緒に焼きそばを会食。

思います。

新しき友らと学び語りひて開けそめたる道を歩む

富士の地で出会ひ語りしわが友と過ごせし日々は忘れざらなむ

「わからない」と言えるようになった

(東北女子大学 家政 二年 小野さくら)

講義の内容が難しく、自分の物の知らなさがはずかしくてたまらなかつたのですが、班別研修で班員のみなさんや先生たちと感想を述べ合ううちに、はずかしさよりも学ぼうという気持ちが強くなっていくのを感じました。

また、私にとってはとても勇気のいることだったので、わからない事を「わからない」と言えるようになったことは私のとても大きな変化のひとつです。

私は、この合宿を通じて、さまざまな所で生活をしていたまったく知らなかつた人たちとめぐり合い、共に学び、共に楽しむ事で友情の輪が広がり、私の中とても狭かつた世界が広がっていくように感じてとてもうれしかったです。この合宿で手に入れた宝物を大切にしていきたいと思います。

合宿を終へて

合宿で出会ひし人のあたたかき思ひは胸に深く残りぬ

ご講義にのぞみし皆のまなざしにあらはる祖国への深き思ひよ

自分自身が先人の精神を受け継ぐことが大切だ

(亜細亜大学 国際関係 二年 長田里香)

この合宿において一番感じたことは、日本に生まれて本当によかつたな、ということでした。五ヶ月間のアメリカ留学からの帰国後まもなくの合宿でしたが、アメリカで感じたことは、個人主義でありながらも公の意識を持っているということでした。この意識は聖書の中から出てきていると感じました。今の日本人は、公の意識を持たずに個人主義というよりも自己中心主義の風潮にあるように感じます。

この合宿を通じて日本人本来のつつしみ深い精神と日本の歴史、先人の精神を学ぶことにより、私自身が磨かれてゆくと感じました。自分自身が先人の精神を受け継ぐことが大切だと感じました。

来年もふたたび会ひたしお互ひに語り合ひつつ学びし友らと

## 第二のふるさと

(羽後信用金庫 須田清文)

各地各所にて活躍なさつてをられる諸先生、諸先輩、諸友と心合はせて集中して取り組む本合宿は、第二のふるさとの様な感じがしました。

短歌導入講義を担当させていただきましたが、関係した皆様に感謝申し上げます。ししまの道に初心にもどり励んで

まゐりたいと思ひます。

合宿二日目の朝の集ひより短歌の短冊が配布され、選者の  
所感発表がありました。とても良い事と思ひました。

合宿三日目の朝の集ひの折に

君が代のしらべとともに日の丸はのほりゆくなり子どもらの手で  
日の丸ののぼるにつれて富士山のいただきわづかにあらはれゆく  
かな

一面の雲去りゆきて朝日子に照らさる富士を仰ぎ見るかな

### 歴史の事実を知らしめることの大切さ

(戸田建設(株) 青山直幸)

「富士のさと国立中央青年の家」での合宿参加は初めてで  
あったが素晴らしい自然環境と施設であった。ことに、富士  
登山が天気にも恵まれたことは本当に幸ひであった。

私は今年も女子班の班付となったが、班員は皆純粋で素直  
な学生ばかりであった。

四日目の小野先生の御講義は、わかり易く、ことに、昭和  
天皇のマッカーサーとの御会見や全国御巡幸の話は、班員一  
人一人に深い感動を与へたやうである。現在の教育現場では  
ほとんど教へられてゐない歴史の事実を知らしめることの大切  
さをあらためて感じた次第である。

東儀先生の御講義及び雅楽演奏を聞きて

主旋律を奏でるといふ「ひちりき」の調べ胸ぬちに響きわたるも

カメラ・レポート15



「創作短歌全体批評」と題して国立療養所福岡東病院副院長・小柳左門先生は、「班に戻り友達の歌を批評する時に、その人の気持ちを出来るだけ偲んで、言葉を捜していつて下さい」と述べられた。

なつかしき思ひ沸きくも横笛の切々とした妙なる調べに  
天上に響きわたれる神々の調べとも覚ゆ笙の音色は

## 第十二班—女子学生—

自分の国について何も知らなかつたんだなあ

(多摩美術大学 美術 一年 西原さや香)

私がこの合宿に来たのは父の勧めがあつたからです。「大学生になつたら必ず行ってこい」と前から言われていたので自分から学ぼうという気持はありませんでした。美術大学に通い「日本」の事を学ばなくても……と不安なままこの合宿は始まりました。その不安は初日で消えてしまいました。先生方の講義を聞いて今まで自分は自分の国について何も知らなかつたんだなあと恥ずかしくなりました。

日本の歴史、今まで歩んできた道を深く深く考え心に「ウン」と来る感動を覚えました。昔の私とはなにか違う心が澄みきつたようなそんな心の晴々とした気持が今私の中に在ります。今、私があつたところにいるということをとってもありがたい思い先人達に深く感謝して、これからの様々な場面において、この自分のありがたい命を燃焼できるようにになりたいと思います。どうもありがとうございます。

み友らと共に学んだ五日間今日の日をよもや忘れじ

心から日本のことを知るにはここが一番だ

(九州大学(理) 地理惑星科学科卒 石川麻由)

私は今秋から、約二年間ドイツへ行く予定です。その前に日本についてきちんと勉強しておかなければ、外国の人に何か質問をされても正しく答えることができないので今いろいろと日本のことを勉強しています。この合宿には「日本の勉強をするにはうってつけなので是非参加しなさい」という知人のすすめで参加しました。

昨日長内先生が「知解」「体解」「信解」のお話をなされてましたが形式的な上辺だけの日本の勉強は自分でいくらでも出来ますが、本当に心から日本のことを知るには、このような場で勉強するのが一番だと思いました。

また雅楽に触れることもできました。雅楽は日本の最上級の芸術の一つだと私は思っています。最高の芸術を作っておられる最高の芸術家の方に直接説明を受けられたなんて夢のような機会はなかつただろうと思います。上手に言葉に表現することが出来ず、大変もどかしいのですが、本当に感謝しました。有難く思っております。

雅なる音色奏でる人々に誘はれ見たり大和心を

## 「根」の部分から考えた

(山口県立衛生看護学院 第一看護 一年 橋本朋子)

今回の体験は、私にとつてとても良い経験になりました。まず最初に講義の後での班での研修。人それぞれにとらえる部分が少しずつ違い、私にとって大変興味深くまた自分とは違う意見——根本的なところから順々に立ててある意見——が聞くことが出来てとても面白かったです。

先生達がなさって下さる講義や講話は、私が今までこれほどまで納得させられたものはないくらい感動することが何度もありました。うわべだけの話しではない、根本的な部分つまり先生がおっしゃっていた日本の土台を造っている「根」の部分の話を聞くことができたのだと思えて、とても嬉しかったです。

歴史上の人物や天皇のことを知って、その方々の考えを知っているからこそ、形だけの考えではない「根」の部分から自分が考えられると感じました。今回の先生方がお話になったことを胸にとどめて自分自身もつと本を読み学習し、日本のことについて深く考えていきたいと思えます。

み友らと共に歩んだこの日々を胸に刻みて我進みたし  
おのおのの心にさざりし希望の矢新たな決意ここにあり



「創作短歌全体批評」の一コマ。作者の気持ちを丁寧に辿られ、時にユーモアを交へつつ言葉を直される小柳先生の批評に、共感の笑顔がこぼれる。

視野が広くなった

(東北女子大学 家政 二年 芳川愛)

班のメンバーは皆個性的でした。学校で学んでいることもそれぞれ違っていたり、住んでいる場所も違っていたのでいろんな話を聞くことができました。更に先生方の講義もまた新鮮に感じました。私は自分の視野の狭さに気付かされました。

小野先生の「根っこ」の尊さや長内先生の知解・体解・信解ということは私の心の中に深く残りました。今まで私は科学がどんどん発展してきたように、人々の考え方も現在の考え方が最上だと思っていました。四泊五日の合宿を通して古いものが悪い、新しいものは良いという単純な思考を改めることができました。また雅楽という滅多に接することができないものにも出会えて本当に嬉しかったです。地元東北に帰ったらここであった出来事を話そうと思っています。

過ぎ去れど四泊五日友と居た御殿場の地を我は忘れじ  
外からの情報入らぬ日々過こし学ぶといふこと体験しけり

班別研修でも涙がとまりませんでした

(東北女子短期大学 保育 二年 小林亜矢子)

学生生活最後の年にとても貴重な体験をさせて頂いたと思っております。中でも私の心の奥にまでしみわたるような

お話しは三つあります。体験発表の工藤さんのお話にありました「虐待」などです。子どもは産れた時からみんなが幸せになる権利があるのに、どうして一番大切な親から愛情を注いでもらえないのか、子供達のことを思うと自然に涙が出てきます。二つ目は小野先生のご講義の中にありました「戦争」についてです。班別研修でも皆の感想を聴き涙がとまりませんでした。三つ目は長内先生のご講義です。「お母さんは『ただいま』という言葉で我が子の一日がどんなものだったのかが分かる」と言われました。私はとにかくすべての親と子が素晴らしい、かけがえない絆を築き幸せであってほしいと思います。私は本当に幸せです。私の理想とする父親像母親像、家庭、家族は私の家族、家庭そのものだからです。将来私は私の母のような母となり、父のような夫、子供たちと私の家庭のような家庭を築きたいと思っています。

み友らと共に過こせし思ひ出に涙こらへて別れを告げる  
富士を見て心広くと誓ひしは新たな発見嬉しきことよ

学んだことを 一人から千人へ

(九州工業大学 情報工 四年 上河真子)

合宿に参加できた喜びを、この合宿を支えて下さった皆様方と、私を飯塚の地から送り出してくれた方々へ、感謝の気持ちと共に今すぐ届けたい思いでいっぱいです。

ひとつひとつの講義、研修、イベントまた富士での生活か

ら尊いことを学びました。合宿全体から感じる事が出来た日本人の姿は「雄々しさ」と「つつましさ」でした。自然と神々が無限にお与え下さる「不可思議」と「複雑さ」に対し古来より日本人は雄々しく、同時につつましい姿勢で向かい合って来られたのだという思いが自分の心の底から湧き出たような気が致します。

尊い尊い私たちの御先祖が命をかけて守って下さった日本の国柄を現在の日本そして未来の日本へ伝えて行くという覚悟をこの合宿で固めることができました。そして私は女性として日本人の「つつましさ」の手本となれるような日本人女性に成りたいと強く思いました。

初めて見た富士の裾野は本当に美しく神秘的でさえありました。その姿は「この合宿で皆が学んだことを一人から千人万人へと日本中へ伝えて行きなさい。きつとできますよ。」という天のお言葉であるように思えてなりません。

日の本の信を広く伝えよと我に呼びかけし富士の裾野よ

## 大役が何とか果せた

(福岡県立嘉穂高校教諭 小野吉宣)

四日目の午前中の私の担当する講義に対し、小柳陽太郎先生には準備段階から二度に渡って指導していただき登壇した色々と課題を新たに見出す未熟な講義であったと思ふ。しかし班に帰って皆が涙ながらに感想を述べてくれ、苦心が予



班別短歌相互批評。作歌を鑑賞し作者の気持ちを偲びつつ、それに相応しい言葉を搜してゆく。

想以上に報われたと感謝した次第である。

皆は借り物の思想でなく、自分の心を働かせ、心の目を開いて、自分の頭で考えて思想する学問をもっと根本的に更に体系的にやるマゲマみたいなものが内面に沸々とたぎり出しているようです。連絡を気軽に取り合つて今夏の富士での「ゑにし」を花咲かせ実りあるものにしたと思います。

呉の第四十七回合宿セミナーに向けて、決意も新たにがんばりましょう。とにかく素晴らしい出会いがありました。

講義の折に

合宿の生命の流れつながむと沸き立つ思ひ言葉にのせる

思ひのせ「尊きことぞ尊かる」と話してゆけば心高なる

大君はまごころ尽し敵將に真向ひ給へり民を思はれ

ありがたき国の姿は時を越え語り継がなむ生命のかぎり

### 第十三班 女子学生

「我が国」に対する思いが深まった

(東北女子短期大学 生活 二年 澤井一葉)

今回の合宿では、私が生まれた日本の歩みや心を真剣に考えるきっかけとなり、確実に「我が国」に対する思いが深まりました。日本の文化伝統を守り伝えていこうという意識は、日常の私たち若者の中にもあります。「日本の文化伝統」と

いうと、とかく「伝統的な技術・技能」にとらわれがちですが、一番始めに守り伝えるべきことは、「日本人としての心」と気づきました。

現代は、「愛国心」について考えるきっかけが少なく、多くの若者に日本人としての誇りを持ってといっても難しい時代だと思います。しかし、今回の合宿に参加し、ご講義を拝聴するうちに、自分のふわふわ軽かった心が、自分は多くの祖先から続いてきた命を引き継いだ一人の日本人であるという実感に変わりました。もつとじつくり本を読み、お話を聴き勉強する必要があると感じました。

日本人としての誇りを持たなければならぬ

(山口大学 教育 一年 竹下真生)

私は日本という国が大好きです。日本で生まれ日本人として生きているからには、日本を愛し、日本人としての誇りを持たなければならぬのだと、合宿を終えた今強く感じています。

一日目の講義で、占部先生が「自分を大切にすることはお母さんを大切にすること、それと同じように、国を大切にすること」ということは、歴史を大切にすることである」とお話しされたことが心に残っています。

新しい歴史教科書の問題がありますが、音楽の教科書からも、昔から日本に伝わる歌曲が消えつつあるそうです。懐か

しく思う心が今の日本人に欠けていると占部先生は言われましたが、まさしくその通りだと思いました。

研修では本音で語り合えたとし、先輩のように自分の考えをいえるようになりたいという目標もできました。感謝の思いで一杯です。

### 合宿の意義を友人たちに伝えたい

(在宅介護支援センター コスモピア熊本 折田成予)

今回の合宿に参加するに当たって、「自分は皆についていけないのだろうか」というような少し不安な気持ちがありました。が、班構成へのご配慮や、私にもわかりやすいご講義の数々に、そんな不安も吹き飛んで集中することができました。

ご講義の内容も教科書や靖国神社参拝問題など、今まさにマスコミで頻繁に取り上げられ、自分も興味のあることだったので、この身に迫ってくるような気がしました。東京裁判やA級戦犯という言葉は知っていても、それがどんな意味をもつか、今まで知りませんでした。しかし、ご講義で、大東亜戦争の「敗戦後遺症」が至る所で絡み合い、今日まで影響を来しているという事実を知ることができました。

もしこの合宿に参加していなければ、今回の体験がなかったのかもしれないと考えると、国文研の合宿の意義を自分の周りの友人たちに是非とも伝えたいと思います。

夜更けまで友と語りしあの夜の切磋琢磨に胸熱く燃ゆ



慰霊祭。戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、心を込めてお慰めした。

## 「感じる心」の大切さに気づいた

(東北女子大学 家政 二年 大池麻心)

私は、この合宿に参加するに当たって一つの目的がありました。それは、自分にはない多くの人たちの考えを理解しようということでした。その目的は、先生方のご講義や班別研修ですぐに達成されました。それ以上に、今まで自分が習ってきた「日本の歴史」というものが、全部が全部真実でないということに驚きを感じました。このことは、この合宿に参加していなければ分からなかったことだと思います。これからは一つの考えに固まらず、多くの本を読み、色々なものを見た上で、自分なりの考えを持ちたいと思います。

また、東中野先生とお話しした際仰った「女性は感性を豊かに」という言葉にはっと我に返る思いでした。女性のみならず、人として感じる心がなければ心の貧しい人になってしまう、と改めて道徳の大切さに気づきました。

巡幸にて民の笑顔を喜ばるる陛下の御製に友と涙す

## 心の底から勉強が楽しいと思えた

(有万 デザイン企画事務所 デザイナー 諏訪田尚子)

なんと充実した時間だったことでしょう。これまでの学校教育の中で、教科書のアンダーラインを引いた部分だけを覚え、高得点をとることだけに満足して、我が国の歴史につい

て深い感情を何も抱くことはなかった自分の無知さに気づかされた合宿でした。文献の一つ一つについて突っ込んで教えてもらい、「ああなるほど」「へえ面白いなあ」と心の底から勉強が楽しいと思えた自分を嬉しく思います。

班別討論でも、自分の意見を人前で発表することが苦手でしたのではじめは嫌でした。でも、「格好いいことを言わねば」「馬鹿だと思われたくない」そんな気持を取っ払って思い切ってしゃべりました。うまく言えなくても自分の意見を進んで発表するなんて私の中の革命でもありました。

短歌創作では、一人一人の歌を皆で吟味しあって最終には皆すばらしい歌に仕上がっていったことに感動しました。

我が国を憂へる友に出逢ひきて焼き付けられた心の富士よ

## 「心解」に努めた

(熊本県立教育センター主幹 白濱裕)

久々に学生班の班長として、全日程のコマを受講することができて有り難かった。班員一同、素直な気持ちで熱心に取り組み、大いに成果があがったものと思ふ。

班別研修の持ち方として、長内先生が仰った様に、いはゆる「知解」ではなく「心解」、即ち、感性を働かせて心の眼で受け止めるよう努めた。特に、小野氏が紹介された昭和天皇のご巡幸の場面の輪読の折りは思はず皆涙して読んだ。

三日目夜は、体験発表を終へられた工藤氏に班に入つてい

ただき、発表を敷衍するお話を伺ったが、皆、身近な問題として傾聴してゐた。今日、男女共同参画社会に係る施策が進められている中、ともすれば家事や育児、母性軽視の風潮があるが、今後、女子班において、次世代の子孫を育む女性としての様々な課題、生き方について別途プログラムを組むことも有意義かと思ふ。

### 自分で真実を見極めたい

(福岡県立大学 人間社会 三年 井上智晴)

今まで自分の国の事を深く考えたことがなかったので、良い機会となりました。ニュースなどで耳にしたことがある程度のことが、時代の背景と共に学ぶことができました。

なにより驚いたのが、今まで大学で学んできた事の全てを覆されたことです。確かに現在のマスコミの力は強力で情報操作が簡単に行われてしまうような世の中です。だからこそステレオタイプにならないようにいろいろな見方をしていきたいと思ひました。どつぷりと通説にはまっていただけに、まだはつきりと自分の考えを見付けていません。今回、貴重なお話を沢山聞くことができたので、それを含めてもつと勉強していこうと思ひています。紹介された様々な本を読んで、自分で真実を見極め、うわべだけの生き方を変えていこうと思ひました。



四日午前、「日本の国柄」と題して福岡県立嘉穂高校教諭・小野吉宣先生は昭和天皇が敗戦の折マッカーサー元帥を訪ねられ、戦争の全責任を負はうとされた時の事を切々と述べられた。

我々にとって大切なことは何かを教へてくれた

(中島法律事務所 中島繁樹)

充実したすばらしい合宿であった。先人の思ひにつながる  
こと、先人の思ひを歴史の中で見つめることが、現代の我々  
にとつて如何に大切なことであるかを、いろいろの角度から  
教へてくれる合宿であった。和氣藹々とした中で楽しい四泊  
五日を過ごすことができた。

四十六回を数へるこの合宿は今なほ、その存在意義を維持  
してゐる。若い人達をこの合宿に参加させ得る力を持ちたい  
と切に思はれた。来年は私の娘といっしょに参加したい。

霧雨の夜の集ひに濡れつつも大声出だし歌うたひたり

問題解決の手がかりを見つけた

(中村学園大学・短期大学部教務課 中村智道)

以前、韓国に旅行した際、友達になつた愛国心の強い22才  
の韓国の青年は「我々のある程度教養のある若者は親日です」  
とはつきり言っていました。それなのに日本の偏つた教育、  
マスコミは日韓の溝が深まっている様な印象を与え続けてい  
ます。私はこの現状を打破出来ないものかと何時も思つてい

ましたが今回、伊藤哲夫先生のお話で「真の友好を結ぶ為には主張すべきことは主張する」「日本は先人たちが命をかけて守つてきた国だと自覚する」ということの大切さを学ぶことが出来ました。謝罪し補償したがる団体も、それを助長するマスコミも私には理解出来ません。韓国旅行からの問題を解決する手がかりが見つかった気がします。先生の言われた様に勉強して今度は答えを見つけたいと思います。

国思ふ若人たちとともに学び心の底からよろこびのわく

ひちりきの音色ところにひびきたり神のみこえのきこえたるがに

合宿の充実感を伝え参加を勧めたい

(船橋市議会議員 中村実)

「えらい合宿に来てしまった！」当初の率直な感想だった。しかしながら一日一日が思ひの外、早く過ぎて行く。この感覚こそ引き込まれている証拠だった。不安はいつしか充実感に転化していた。気が付けばもう最終日。参加した仲間との別れが何とも惜まれる。そもそも参加の動機は既に参加した方々の中にあるバックボーンを是非、自分も追い求めたいと言ふことであつた。合宿によつて養われた目に見えない感性を共有出来た実感があつた。この感動を多くの友人知人と分かち合いたい。来年は四年に一度の審判の直前であり参加を断念せざるを得ないが、この充実感を伝えることは出来る。一人でも多くの友人知人に参加を勧めたい。そして再来年に

は更に多くの仲間達と「素晴らしい時間」を共有したい。

富士のさとに真摯に学びし時は過ぎて友との別れのひたに惜しまる

## 年に一度の合宿への参加が活力の源

(さいたま住宅検査センター 村山寿彦)

三年振りの参加であったためか、合宿は総てが新鮮に感じられ、感動と充実感のある四泊五日であった。日程にも変化があり、毎日がとても短く感じられた。

合宿を終った今、私は未だに戦後の占領政策の後遺症から脱し得ぬ現状を正し、一日も早く本来の日本のすがたを取り戻さねばならぬとの思ひを新たにしていゐる。

班では輪読を中心に研修したが、班員各位の活発な発言と前向きな姿勢に大きな刺激をうけ、いつの間にか衰へかけてきてゐた氣力を奮起させられた氣がする。年に一度の合宿への参加が私の活力の源であったと改めて感じた次第である。鉾納めてを声たからかに歌ひたり小雨しと降る夜のつどひで

## 四十日も合宿をした様な思ひだ

(主婦 尾関千枝子)

四泊五日も斯く充実すると四十日も合宿をした様な思ひで同じ班の方々は言ふまでもなく若い学生さん達にさへ親しさを感じる。感動・感謝私の心は溢れんばかりだ。又、三つこ



「雅楽道友会」の方々による雅楽の演奏

の齡で愉快の極みの事があった。その一、富士登山では「森林散步」を申し込んで行つた。行けども行けども自分の思ひえがく森林歩きとは違つたが引き返さなくてよかつたと、つくづく思ふ。須走りを杖を借り、若い方に手を取られ歩けたのだから。その二は輪読だ。寺子屋もかくありなむを毎日体験した事である。班長様本当に有難うございました。その三、夜の集ひに雨の中、班で「鉾を納めて」を音程もハーモニも構はずに、ただ元氣一杯歌つたことである。男の中に女が一人で、お気を遣はせてしまった。

夜の集ひ古事記に依りし寸劇を真心こめて若き人演ず

### 学生達の勉強会に微力を投じたい

(アサヒ飲料㈱ 坂東一男)

三十年ぶりの合宿全日程参加で、いささか疲れ気味だが、心地よい感動に浸つてゐる。

サンケイ広告で参加した二名の方と充分に話し込んだ。

矢継早やの新しい取組みで合宿教室も変り、実に美事な充実した合宿が出来たことに感謝する。

来年の江田島合宿に向け、学生達の勉強会に微力を投じた  
い。

御殿場の斎庭に大人を迎へんと声はりあげて祭文をよむ

正しく歴史に学ぶことの大切さを感じた

(小田原城内高校 原川猛雄)

四泊五日間、素晴らしい班員の方々に恵まれ、皆さんの真剣な取り組みの姿勢に衿を正される思ひがしました。班での輪読や討論に集中して充実した時間を過すことができました。伊藤先生の「国は悪によつて滅びるのではなく、愚によつて滅びる」というお言葉が心に残つてゐます。知らないと言ふことは恐ろしい。過去の真実や父母の思ひを知らないままに、間違つた判断をして、日本の将来を誤らないやうにしなければならぬと思ひました。それが、今生きてゐる私達の責務であると感じました。先生方の力強いご講義にも圧倒されました。今後、内容を咀嚼しなほし勉強していく必要性を感じてゐます。

### 第二十二班―社会人―

多数の人に聞いてもらいたい

(川重八千代エンジニアリング株式会社 山本博資)

合宿における講義の内容は、改めて他の所ではなかなか経験できない、レベルの高いものであり、やはり多数の人に聞いてもらいたいものでありました。なかでも「講孟餘話」一日

本の思想」「日本の國柄」の講義は、感銘深いものであり、班別討論では、意識して国家・国民について話し合うに良いテーマでした。

ビデオや音楽が、講義・講話にも効果的に取り入れられ、ヴァリエーションを付ける工夫がなされ、理解を助ける他に感性を豊かにするような印象深いものとなりました（「雅楽」、シンセサイザー曲「古事記」等）。この種の視聴覚に訴える試みは、今後とも充実していただくことを希望します。

講話「雅楽への誘い」を聞きて

洒脱なる語りに誘はれ厳かな雅楽の世界にしばしたゆたふ

いにしへに外より来たりし雅楽をもわが国独自のかたちに変はりき

世界にも類まれなる日の本の雅楽のいはれを初めて聞きたり

笙に笛箏築合せた三管の音色は莊重神々しかも

皇室と共に衰微と繁栄の歴史を耐へ来しうるはし雅楽は

もつとしつかり勉強しよう

（伊佐ホームズ株式会社 山川和男）

「もつとしつかり勉強して参加しないといけない」

二泊三日の研修を終えての私の正直な気持です。諸先生方の熱心な講義、班別研修での討議等では、殆ど口をあけて聴いているだけでした。忙しい仕事の合間に、自分の興味のある新聞、雑誌の記事を拾い読みする程度では、意見を求められても十分な知識ありません。今回の合宿を良き機会とし

カメラ・レポート 21



「古典に親しむ」と題して昭和音楽短期大学部教授・国武忠彦先生は、「古事記ができた頃は我が国は中国文化の圧倒的な影響下にありました。今ここで日本の古い言葉をそのままの形で残して置かなければ大変な事になるといふ危機感がありました。本居宣長はこの本があることが本当に嬉しいと云つてゐます。この本から日本で一番古い言葉がわかるのです」と述べ、「天岩戸」のくだりを丁寧に辿ってゆかれた。

て自分のテーマを決めて勉強し、また参加させていただきたいと思ひます。合宿の内容につきましては、期待しております。誘われて参加している者や漠然とした問題意識のまま参加している方も少なくないと思ひます。そんな私達に対し、今後とも、戦後の占領政策の柱でもある、米国の日本のマスコミへの操作等による、それこそ私達の中にある「から心」を根底から覆す様な講師、講義を期待いたします。来年以降も機会があれば参加させていただきます。

よろしくお願ひ申し上げます。

つどひ会ひて今日は別るる友なれど我が心には姿とどめん

### 合宿の過程全体を通じて確信したこと

(宮城県立柴田農林高等学校 教諭 加藤英夫)

今、小田村四郎先生の『占領後遺症の克服』を読んでいます。合宿で最も心に残る講義をされた伊藤先生が「占領過程を勉強して欲しい」と言われたからです。占領後遺症の本質が的確に、そして分かり易く書いてあり、大変為になりました。以前、小柳陽太郎先生の『教室から消えた物を見る目歴史を見る目』を読んだ時は、湧き上がるような喜びを感じましたが、今回は、静かな感銘を受けています(合宿期間中、両先生の警咳に接することができたのは幸いです)。

この両著、そして合宿の過程全体を通じてつくづく思った

ことは、個人も国家もその有様の理想は「文武両道」にあるということでした。今回の合宿で尚武の思想を説いた先生はいらっしゃいませんでしたが、多くの先生方が言われた「先人の思いに連なるような学問」や「日本の思想」とは、結局平安の昔より「右文左武」とうたわれた我が国の伝統的な国風を回復することに違いないと確信しました。

### 自分の人生を見つめ直すきっかけに

(電源開発株式会社 関東支社 植田伸一)

今年五十歳といふ人生の節目を迎へて、もう一度自分といふものを見つめ直してみよう、その為には先人達の生き方を学ぶ事だと思ひ二十数年振りに参加しました。合宿は、私の想像してゐた通りの緊張感が漂つてゐて、五十年といふ私の人生の長い間の垢を洗ひ流していつてくれるやうでした。特に、伊藤先生の「国は悪ではなく愚によつて滅びるのだ」と力強く仰られた言葉には、私の物の見方、考へ方の足りなさを痛感させられました。それは、事を成すには實を識り、かつ体からほとばしり出るやうな情熱と至誠が必要だといふ事です。さう感じた時、私の胸の奥深くから何か熱くこみ上げてくるものがありました。また、歴代天皇の御歌を詠んでいくうちに天皇は、こんなにも日本の国を思つてゐて下さったのかと感じ、感情が昂まり涙してしまひました。私は、このやうな素晴らしい日本に生まれた事を幸福に感じると共にこ

の胸の昂まりを忘れることなくこれからの人生に挑戦してゆかうと思ひます。このやうな合宿教室に参加できた事を天に感謝します。

先人の遺せし貴重な言の葉を胸に刻みて我が道歩まん

### 敗戦の体験を風化させてはならない

(熊本市役所 東部環境工場場長補佐 折田豊生)

「日本は愚によって滅びる」といふ伊藤先生のお言葉は、今更ながら胸に応へた。昨今の世の風潮に流され鈍くなりつつあつた危機への感覚を一気に刺激され、日頃の生活を強く省みしめられたからである。我が国の現状にも己の生活にも、国家崩壊の要因を挙げるならば、思ひ当たる節は幾らもある。GHQの巧妙にして苛烈な占領政策もさることながら、それに何十年もの間忍従させられ、馴らされてきたのは結局は、我々が無知であり怠惰であるからである。風化させてならないのは、戦争の体験ではなく、敗戦の体験であると言はなければならぬ。

小野吉宣先生の御講義をお聴きして

みほとけのごとく国民を思ひたまふ大御心に涙こぼるる



「若き友らへ語りかける言葉」と題して国民文化研究会常任理事・長内俊平先生は明治天皇御製を拝誦され、「明治天皇様は道端のこの老人と一体になられてゐる。これが“信解”です」と述べられた。

## 第二十三班―社会人―

異文化との取組み方が大事だ

(伊佐ホームズ(株) 伊佐 裕)

今回の合宿では、社会人特別コースとして班の全員が同じ気持ちで取組んだので、時間差のバラツキが少なく、講義、輪読、班別研修と各々つながり良く、緊張感を持ちながら参加でき、輪読の深さ、楽しさを味はひました。

御講義内容は、見事に日本人として最も大切にされてきた「誠」といふ点に帰一して行く各講師の御講義で、特に長谷川先生の御講義の中で日本人の漢字の取り入れ方については、大いなる民族、国の力を感じました。全ての面で今の時代も同じく、どの様に異文化と取組むかが大事だと思ひ、力が湧く思ひです。

以前合宿に参加せし父を偲びて

父もまた若き友らに交はりてこの合宿に喜び参加せし

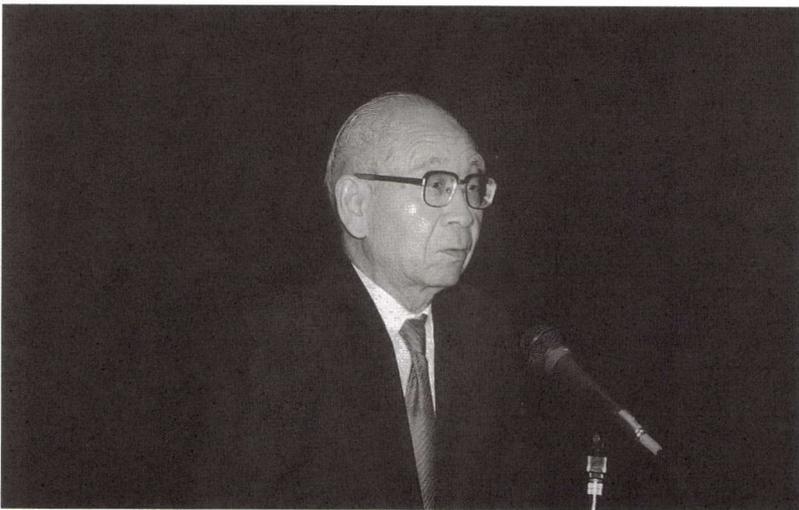
この合宿に国の行末期待して逝きたる父と字ぶ心地す

先輩方に近づけるやう前進したい

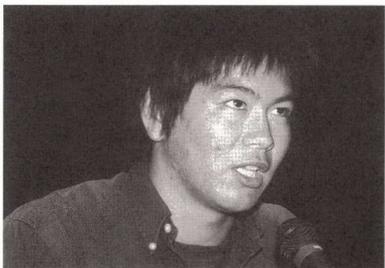
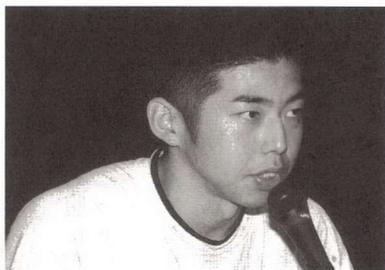
(防衛庁契約本部長崎支部 鏡信弘)

先輩方の御講義に日頃の生き方が凝縮されてゐることを感

カメラ・レポート 23



「合宿を顧みて」と題し、国民文化研究会会長・小田村四郎氏は、合宿初日からの各講義を順に丁寧に振り返られた。



「全体感想自由発表」参加者は次々と登壇し、思ひの丈を述べていった。

じ、大変感銘深かった。一歩でも先輩方に近づけるやうに前進し続けるしかないと思った。占部さんは、野中至夫婦のお墓や御遺族を尋ね、実際の遺稿を読まれて、心のこもった話をされた。小林さんは、本当に松陰先生と一体となつてをられるやうな迫力で、日頃本当に松陰先生の御本を読みこまれて生きてをられることが感じられた。その思ひを一語一語はつきりと大きな声で丁寧に分りやすく話して下さった。小野さんは、ほとぼしるやうな思ひをぶつけられながら、或ひは抑へられながら説得力のあるお話であり、昭和天皇の御姿を通じて、日本の国柄を語られた。胸が熱くなった。

年を経て再び共に合宿に集ひし友らと語る楽しも  
数ならぬ吾にあれどもみ友らとともに学ぶは嬉しかりけり

### 交友を深め腹にたまる学問をしたい

(若築建設(株)東京支店 池松伸典)

合宿参加は、八年ぶりです、社会人班で十分に研修させていただき、有難い経験をさせていただいたと思つてゐる。

日頃社会人として、仕事に追ひまわられる中で、時折このままでもいいのかといふ疑問が浮かぶこともあつて本を読んだりしてゐたが、自分の心に十分響いてくることは少なかった。この物足りなさもあつて、今回合宿へ参加させていただいたが、いかに自分が日本人として生きていく上で大切なものを見失つてゐるかに気づかされた。

また、この合宿で行はれてゐることがいかに大事なことであるかに、改めて気づかされた。今後、友との交流を深めることによつて「からごころ」ではなく、自分の腹にたまつていく様な学問をしていきたいと思ふ。

長谷川三千子先生の御講義を聞き

古への人らの思ひ偲ぶこそ大切なりと師はのたまへり

古への文字なき代には今よりも話す言葉も生きてありけむ

### 来年の合宿につながる日々を過したい

(中尾スタジオ 中尾国博)

昨年の合宿では写真班として参加させて頂きましたが、今年には、写真班をアドバイザーしながら、社会人特別コースへの参加となりました。昨年と違ひ輪読にも加はり、学生の時の合宿での想ひがなつかしくもあり、緊張した時間でもありました。毎日の努力といふわけにはなかなかうまくいきませんが、月に一回は福岡等で行はれてゐる輪読会にも参加の気持ちが湧いてきました。一年に一回の合宿ですが、色々な方々と寝起きを共にして過ごす時間はいろんなものを私に与へてくれました。

富士の地で過した一週間が、また来年の合宿につながる時間となるやうに頑張つていきたいと思ひます。

子供に思ひを伝へたい

(影島興産(株) 影島一吉)

昭和五十年大学卒業後、社会人になって初めての二十八年振りの合宿教室への参加でした。この間の諸先生、先輩諸兄の合宿教室運営への御尽力に頭が下がる思ひで一杯です。

久し振りに参加した切っ掛けは恩師のお誘いと共に我が子ら(高校生二人、中学生一人)の教育や日本の政治情況について、自分の頭の整理を試みたくったからであります。今合宿でいろいろと学んだ事を踏まへて、「先人の思ひ」そして「己自身つまり親の思ひ」をまづ第一に自分の子供に伝へて行きたいと思ひます。

明日からまた普段の生活が始まりますが、合宿教室の皆様から力を頂戴したみたいで、元気が出てまわりました。有難う御座いました。

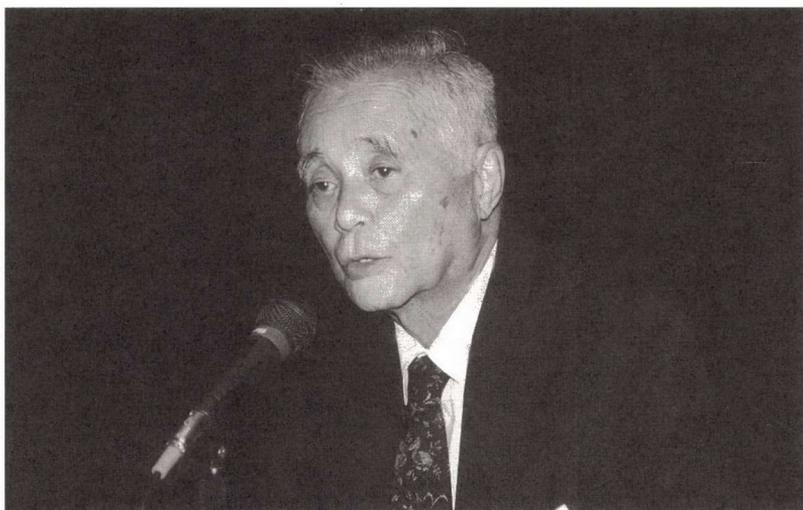
## 第二十四班 | 社会人 |

初心に帰りたい

(湯亭くんや代表取締役 青砥誠一)

久し振り夏合宿に参加致しました。先生、先輩同期の方々懐かしい御顔を久し振りに見る事が出来ました。長い間

カメラ・レポート25



「閉会式」国民文化研究会副理事長・寶邊正久先生は先の戦争で亡くなられた同僚の友を思ひ返され、「この合宿で学んだことをこれからも友と便りをかはし、深めていって下さい」と激励された。

合っていない方々とも何のわだかまりも無く昔の時代に帰り親しく話が出るのは国文研の持つ底力、そして魅力であると思います。社会人となり仕事にかまけて日々の勉強をそして活動を怠っている自分を再確認しました。初心に帰り、日々の仕事の中に如何に国文研活動を取り入れる事が出来るかを考えて暮らしてゆきたいと思います。

夏季合宿に参加して

久し振り夏合宿に参加すれば懐かしき顔数多く見ゆ

遅くなり夏合宿に参加せし我を御友は温かく迎ふ

参加者は少なくなるも御友らの熱き思ひは変らざりけり

忙しき時間を割きて合宿に参加し給ふ思ひ尊し

近くよりラッパの音の聞こゆなり演習場は近くにありて

参加できてよかった。

(熊本製粉株 吉村浩之)

限りある時間を有効に使ふ事が出来たやうに思ひます。

有難うございました。

慰霊祭を終へて帰りし道すがらラッパの響夜空に流る

「この国」「わが国」

(アサヒ飲料株 澤部和道)

御講義や先輩の体験発表をお聞きして、普段の自分の生活

で問題意識が低下していたことに気付かされた。普段何気なく流している言葉は実は(マスコミ等の)作為に満ちており、そうした言葉を問題意識を持たず右から左に流して生活することが大切にすべき心を曇らせてしまっていたと実感した。それを気付かされたのは「この国のかたち」と言うのと「わが国」と言う姿勢には天と地程の差があるということだった。確かに今は政治家を含め「この国」というのが一般的となっているが、そこには「わが国」と表現するのと対照的に客観的で何か非常に冷たい姿勢を感じる。

思ひがけず出会ひし友となつかしく語らひをればうれしきこみ上ぐ

自分なりの勉強を続けていきたい

(アダマンド工業株 眞田博之)

今回の合宿で文化感覚をみがく為に学問は必要なのだといふことを思った。自分なりの勉強を続けていきたいと思ふ。

各地のOBが多忙中勧誘活動を続けてゐることを知って何もしてゐない自分が恥ずかしかった。何かできることをやっていきたいと思つてゐる。

吉村先輩の体験発表を聞きて

かねてより先輩の発表聞きたしと願ひてありしが今かなあかな

「奪はれしものは奪ひ返さねば」とふ先輩の御言葉強く我にひびけり

「奪はれしものは我らの心にあり」とふ先輩の言葉は忘れざりけり

特攻隊員の姿に涙した。

(アプライドマテリアルズジャパン(株) 草野直樹)

小野先生のご講義の中で紹介された特攻隊員の写真を見たときは涙を堪へることが出来なかった。練習中のひとコマだらうか、飛行服に身をつつんだ数名の隊員方が写ってゐた。

その内の一人の方が子犬を抱いてをられた。隊員の方々のやさしげなさはやかな笑顔と安心しきったやうに隊員に抱かれてゐる子犬の可愛らしい顔が印象的だった。この青年達の行ひを「あはれな犠牲」「無意味に命を落した」としか評価できない今の世相はやはり間違つてゐると確信する。

私自身、仕事にのみ追はれる生活を見直し改めることから始めたい。

特攻隊員の写真を見て

み命を捧ぐ覚悟の定れる人の笑顔はすがしかりけり

隊員の腕にその身を抱かれる二匹の子犬ともに写れり

学問をやり通して行きたい

(株)日立製作所 伊藤俊介)

社会人になってから初めての合宿参加となったが、昨年までの班長の重責もなく、緊張しすぎずにリラックスして講義に臨むことが出来た。特に楽しみにしていた長谷川先生のお話を聴くことができ、参加できて良かった。難しい内容では



「閉会式」早稲田大学法学部一年・穴井宏明君が、「愛情を持って歴史を勉強していきます」と呼びかけた。

## 第二十五班——社会人——

### 言霊の幸わう国、日本

(主婦 澤部花子)

ご講義で一番心に残ったのは、長谷川先生が「日本は無文字の国で、だからこそ言葉に力があつた」と言われたことです。言霊の幸わう国、日本。マスコミなどの魂のぬけた言葉に日々うんざりしていますが、合宿に来ると先生方や友人の力のこもった言葉にいつもふれることができ、心強い気持ちで生活にもどれます。同時に、自分自身も一言一言美しく心がこもった言葉で話すことを常に心がけようと強く思いました。

遅咲きのあぢさゐの花ゆ音もなく雨の名残りのしづくの落つる  
遠方ゆ来たる友どちは夜遅く一人で帰る雨よ弱まれ

### 歴史事実の裏にある心に目を向けたい

(西部ガス株 中山 史)

何の予備知識も無く参加した合宿でしたが、様々な講義を聞く中で「坐視すること(無関心であること)の罪」という言葉に、今まで歴史や文化をどちらかといえば疎んじてきた自分に改めて気付かされました。

あつたが、本居宣長の学問に対する姿勢というものを、先生はやさしく楽しい語り口の中に、鋭い提示として我々にお示しになられたのだと感じた。学生時代にもまして読書、議論、思索の時間が少なくなつてしまつた自分だが、社会人になつても大切な学問は少しずつでもやり通しておかねばならないことを改めて実感した。また諸先輩方との交流を通して、会社に慣れることなく、一人前の社会人、大人になるよう頑張らねばならないと実感した。また来年も参加したい。ただひとりバスを降りれば富士の地は虫の声のみ聞こえるなり暗き中思ひ出しつつ歩み行けば合宿本部の明るくぞ見ゆ  
こんばんはと挨拶すれば友どちのよく来たねとの声ぞうれしき

### 合宿の緊張感を味はへた

(株柴田 柴田悌輔)

三日目の昼に合宿地に到着しました。ちやうど野外活動の時間割だった為、じつくりと講義用レジュメに目を通す事が出来ました。その為、途中参加ながら合宿に対応する心構へが出来たやうに思ひます。私にとっては、國武、小野両講師の講義、班別研修等久しぶりに合宿の緊張感を味はへた事を喜んでゐます。

### 慰霊祭の折に

かがり火の炎はげしく舞ひあがる師のみ魂らを呼ぶが如くに  
月も隠れいやます闇に炎舞ふ祭文の声響くさなかに

短歌創作や班別研修を通して、物事に（わが国に）関心を持ち、知り、感じ、表現することの大切さ、面白さを感じる事が出来たのは非常に有意義であったと思います。

国際化の流れの中では、わが国を知り、誇りを持つ事がますます必要になります。その誇りとは、今日までの歴史の中にこそ見出されるものだと感じましたし、その歴史的事実の裏にある「心」に目を向け、想いを感じる事が第一歩なのだろうと思いました。

誇りに思える先人がたくさんいた

(F M M i M i 江崎志保)

今回の合宿は「日本人」とは一体何なのかを考えさせられる数日間でした。私達が住む「日本」とはいったいどういう国なのか……。あまりにもその歴史を知らないことに愕然としました。現代人は働きバチのように仕事に追われ、ユーモアのセンスもなく、何か劣った民族のように言われていますが、いや、そうではない。使命に燃え物事に向かいあった姿、窮地にあっても夢を捨てず学び続けた姿があったことを、今回の合宿で知り、とてもうれしく思いました。誇りに思える先人がたくさんいた事、その人生を知り、学ぶ時、おのずと私の中にも日本人としての誇りが生まれているような気がしました。まだまだ知らない事が山のようにありますが、これからも学んでいくことを止めてはいけなくと深く思いました。



「お元気で、また来年会ひませう」再会を期して別れの手を振る。

足もとに咲く見慣れない花を見て富士のふもとに來たことを想ふ  
歌詠んで想ひを語る若き友のその口もとを好もしく見る

### 皇室のありがたさ

(東京芸術大学 音楽 四年 藤波ゆかり)

小野先生の「日本の国柄」の御講義を受けて、皇室が歴史の中に脈々と受けつがれてきたといふことのありがたさを改めて感じました。また、東儀先生の「雅楽への誘い」の御講義を受けて、音楽文化とそれ以外の文化とのつながりを考え、実感することができて良かったです。班別研修の時間には、ひとつひとつのことばをていねいに理解することの大切さを学ばせていただきました。今回の合宿で学ばせていただきましたことを、これからの学生生活の中に於いても一層深めて参りたいと思います。

### 生きた姿を直視していきたい

(株)日本興業銀行 小柳志乃夫)

「功效の説」の中に、また、「からごころ」の中に深くつかつた日常生活の中で、この合宿で学んだものは大きかった。概括化、観念化が流行する時代の中で、ものそのものを観る事の重要さを思った。ものそのものに当たるときに心が動く。その動く心の中に「無文字」の時代の豊かな世界が息づいて

ゐる。それを磨くのが「しきしまの道」であり、それはまた「神の開きしこの道」「進めこの道」の一節、僕らの「芋の根」に至る道である。そこに信をおかうと今さらながら思った。観念論から脱却し、具体的な生きた姿——友の姿、先人の言葉、自然の息吹き——を直視していきたいと思ふ。

中山史さんの感想発表(短縮コース閉会式で)

君が代を大きな声で歌ひしははじめてといふ言葉うれしも

福岡の「ラジオ寺子屋」の放送を聴きつつ学ばむと君語りたる

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



## 短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごごろの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によつて集中的になされてゆきます。

心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、須田清文氏（羽後信用金庫勤務）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに小柳左門氏（国立療養所福岡東病院副院長）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を結集して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取り下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品 (参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

東洋大文四 牟田陽一  
室永山の火口にて

話したしと思ひをりたる友どちに聲かけしとき日ざし差したる

足とらる急な砂利道皮靴の友氣遣ひつ共に下りぬ

国学院大文二 竹下健太郎

富士山の黒き坂道越えゆけば霧の間から青空の見ゆ

京多大文一 荒金健太  
吹きぬける風に負けじと咲きし花その力強さに心打たるる

野中夫妻の業績を思ひて

観測に命を堵けし御夫妻の功を偲べば心震へる

福岡教育大教育四 小林国平  
昨年の班友が三人御殿場に来たるがうれしく心をどりぬ

初めての合宿に来たる班友なるに学ぶ姿のたのもしと見つ

早稲田大法一 穴井宏明  
富士にふくうましそよ風吸ひこめば心はづみて浮きたつごとし

早稲田大法一 小田村正彦  
期待して初めて行きし富士山は遠くで見るより様変わりけり

熊本大文一 村上洋平  
富士のもと集ひて聞きし事は皆心を込めて学ばむと思ふ

富士のもととの国文研の合宿で我知らざると切に思ひき

短歌をば難かしきものと思ひしが言葉があふれ楽しかりけり  
短歌をば難かしきものと思ひしが詠めると何かうれしかりけり

新潟工科大工学部建築学科教授

大岡弘  
国民の約半数が署名せり殉難者らの積放求めて

国力とは国民皆の信念の力なりしと語り給ひぬ  
我もまた持たまほしきかな信念を学問に基づ

くその信念を

新日本製鐵(株)嘱託 今林賢郁  
伊藤哲夫先生の御講義をお聞きして

迫りくる御国の危機をほとばしる心のままに訴へ給ふ

御国今ただならぬ時ぞ心して若きら励めと語り給へり

第二班

京多大文三 服部源憲

野中至・千代子夫妻を思ひて  
我が国に天気予報を始めむと使命に燃ゆる男ありけり

ひたむきに夫を支へんと覚悟して冬山目指す妻のありけり

御夫妻をしのびて頂見上げれば富士への想ひまた新たなり

九州大農二 村山賢一  
ゆるやかに雲は山腹はふやうに上へ上へとのはりゆくなり

防衛大学校人文三 徳 田 雄 三  
友と語りて亡き師を偲ぶ

師が説きし正道いかに難くともひたに求めて  
我は進まん

明治大文四 長 島 圭 史  
山肌に休みてをりし人影は石の如くにぼつぼ  
つ見ゆる

愛媛大大学院修士農一 佐々木 智 訓  
火山灰に根づくムラサキモメンヅル生命の力  
感じられけり

武威工業大工一 石 井 光 尚  
空晴れて仰ぎて見ればそびえたつ雄大な峯に  
心ゆらさる

早稲田大法一 濱 崎 史 嘉  
赤黒き富士の山道歩み行けば黄色き花の美し  
きかな

東急建設(株)調達部部长 奥 富 修 一  
あくがれし霊峰富士のあかがねの岩肌を今踏  
みしめてゆく

福岡県立太宰府高校教諭 占 部 賢 志  
朝のつどひにて

まなかひにあらはれ出づる富士の峰薄墨色に  
映えてそびゆる

息のみて見つつしをればたちまちに雲流れき  
て山影隠れゆく

わが国の気象観測拓かむと若き夫婦の籠りし  
御山

つるはしをふるひて氷壁くだきつつよじ登り  
ゆく姿しのばる

御供を致したしと夫追ひて山頂めざす千代子  
尊し

### 第三班

亜細亜大国際関係二 大 橋 広 和  
米国から帰り来たればいよいよに合宿教室の  
開会せまる

開会式にて  
久々にみともらとにも君が代を唱和しつれば  
鳥肌の立つ

早稲田大政経一 佐 藤 秀 平  
登り来て火口を望めば何人か石を並べて書き  
し文字あり

爆発の姿を思ひ来てみれば「ユタカ」の落書  
きそこにあるのみ

岡山理科大総合一 秋 山 博  
合宿二日目朝のつどひにて

霧はれて一瞬見えたる大きな富士の姿を驚  
きあふぐ

同志社大法三 石 井 一 賢  
伊藤哲夫先生の御講義を聞きて

今のまま国家の意思のなかりせばみ国あやふ  
しと師は述べ給ふ

壇上ゆ獅子吼せしごとくときたまふみ声の響  
きにわが胸ふるへる

時をりはわれらにむかひて指をさし叱咤せし  
ごとき強きみ言葉

西南学院大法一 春 木 寿 潤  
部屋内に鳥の鳴き声きこえて今朝の寢覚め  
の心地よきかな

はからずも国道沿ひにくらしたる日頃の生活  
思ひ出したり

早稲田大大学院修士一 松 下 文 彦  
富士山に登りし折に

岩道を踏みしめ歩めば野中至千代子夫妻のい  
たつき偲ばゆ

東京大文工一 武 田 有 朋  
木も生えぬ新六合目に佇めば一匹の蠅我が手  
にとまる

神奈川県立厚木南高校教諭  
神奈川県立厚木南高校教諭  
山 内 健 生

伊藤哲夫先生の御講義  
先人の心を忘れて「憲法」を語るは愚なりと  
あつく説かるる

学ぶべきを学ばずあるは大いなる愚にほかならずてふ言の葉はげし

「愚」よりも「愚」によりてこそ減びるが国なるものとのみ言葉はげし

先人の思ひを受けつぐ覚悟こそわれらの学びの基なりとふ

力づくよみ心こもる数々のみ言葉胸に深くしみ入る

#### 第四班

神戸大学国際文化四 北村 幸一  
一年ぶりに友らと再会して

「変はらんぬ」と口では言へど去年よりもたくましくなりし君に会ひたり

北海学園大経二 加納 裕己  
富士登山にて

靴に入りし小石の痛みいつしかに忘れて友と語りつつ行く

語りつつ山を下れば時忘れ我にかへればふもとにをりき

佐賀大理工三 片岡 正憲  
富士下山の折に

ごつごつと荒れにし山道のかたすみに紫色のヒメシヤジン咲く

かねてより目にするこのなき花に思はず足を止めて見入りぬ

ひっそりと山道に咲く紫のかれんな花に心奪はる

大阪大理一 有井 宏敏  
幼き日唱歌に聞きて夢に見し富士の雲の中を行くかも

慶應義塾大法四 伊藤 哲郎  
朝の集ひにて

寝不足の冴えないままに外に出て富士を望みて眠けさめたり

雲晴れて西の御空にそそり立つ富士の御山に心奪はる

成蹊大法一 水野 弘幸  
湯船にてはしゃぐ子供の様見れば幼き心を思ひ出すかな

明星大学人文三 久田 広光  
須田先生の御講義の折りに

朗々と夜久先生の唱へられし古事記の響きの思ひ起こさる

(株)アルバック・超高真空事業部  
野中千代「芙蓉日記」霜月三日の箇所を讀みて

北浜 道  
日の御旗掲げて御代を寿がむといたでも思は

せぬ御心ともしも

日本青年協議会 松岡 篤志

吉田松陰「講孟餘話」の御講義を拝聴して

「まさにここに死すべきのみ」との囚人のほかなき言葉に大人は涙す

情の已む能はざるところ自らあふれ出て来て「餘話」はなりける

勝たざれば仁に非ずと激しくも語りますかも魂の底から

吾が志こころ継ぎなすもの出で来るを信じたまひし大人をかしこむ

#### 第五班

東京大文Ⅲ二 石村 善之亮  
富士山に初めてのぼりきてみれば夏とはいへど肌寒きかな

鳥取大医四 江頭 一成  
宝永山火口にて休息の折

たちこめる霧のはれたる一時に空にしるけき富士の姿は

はるばると初めて来つる富士の野に新たに友を得たる縁よ

京都大工一 宮崎 明彦

富士登頂後に再び富士の六合目に来し折  
詠める

残りたる足の痛みもしばし忘れまた登りたし  
富士の頂

長崎大教三 廣 中 涉

バスにて富士山を登りし折  
山道に現れし霧は風に乗り煙のごとく流れ行  
きたり

通り行く子のかけくれし「こんにちは」の声  
に歩みの励まされたり

頂をおほへる雲のはらはれて荒き山肌現れに  
けり

立命館大経三 山 田 篤 史

下途中中の林道にて  
枯れ落ちし葉の積もりたる山道の柔かき土の  
足に伝はる

柔かき落葉の道を踏みゆけばはるかなる富士  
の年月思ふ

昭和音楽大学短期大学教授

國 武 忠 彦

井上正則君、途中帰りしことを知りて  
スケートボード着地の折りに足傷めてもよく  
ぞ来たりぬ富士の麓へ

大学の師に誘はれて来たりしてふ君の笑顔の

清々しきかな

翌日は松葉杖つき現はれぬ君の姿のいたいた  
しきかな

友はみな富士の山へと登りしに君は帰りぬ一  
人故郷に

今の世はをかしといひし君のことば想ひ出し  
つつ夜を迎へぬ

日本青年協議会 別 府 正 智  
に 宝永第一火口にて先発隊として待ちし折

うす白き霧のたちまち覆ひ来て辺りの景色を  
つつみかくしぬ

先頭の新六合目に達すとの報の届きて待ち遠  
しくも

かの方を見やればさきまで見えし場は真白き  
霧にてかくされにけり

下り来る皆の姿は見えねども話し声のかすか  
に聞こえくるかな

うつつらと霧のはれ来て列をなす皆の姿の見  
え来りけり

宝永の第一火口はここにありと伝へんとして  
両手をふりぬ

第六班

早稲田大大学院修士一 星 原 大 輔

貴族院の憲法改正の決議を伊藤哲夫先生  
の御講義にて聞きて

憲法を變へざるをえぬくやしさに静かなる議  
場に嗚咽もれしと

占領のたゞならぬ時に屈服せし人々の思ひ胸  
にせまりぬ

亜細亜大国際関係二 野 村 亮  
足下ゆ斜面に霧の立ち込めて富士の山道恐れ  
つついく

神戸大文三 井 上 智 史  
立ちこめし霧の晴れゆき鮮やかな富士の稜線  
現れにけり

早稲田大法一 高 木 雅 史  
霧は晴れ富士の火口は見えくれど君を想ひて  
心は晴れず

筑波大修士地域研究一 寺 澤 知 之  
みとらの秘めたる思ひ聞くうちに新たなる  
決意胸にわきくる

東北大大学院教育博士一 大 岡 一 亘  
富士山の林の終はれば眼前に大きなしらくも  
迫り来るかな

新聞記者 福田 仁

うたれぬ

富士山の懐深く抱かれし心地す谷間に霧立ち

羽後信用金庫川口支店支店長代理

込むれば

須田 清文

## 第十一班

亜細亜大国際関係二 長田 里香

伊藤哲夫先生のご講義を聞きて

日の本のいまの「愚かさ」正すには歴史の深さに学べと語らる

東北女子短大生活二 竹田 紗耶香

たちこめし霧うち晴れて富士山の美しき峯現れ出ぬ

岡山大法二 野上 哲子

皆共に登りし富士の風景は疲れし心に光射したり

福岡女子大文一 黒岩 礼子

歩きにくき道登り行き広がる富士の景色を立ち止まりみつ

東北女子大家政二 山崎 多佳子

野中夫妻の話聞いて

先人の苦勞思へば重き足軽くなりゆく心地するかな

東北女子大家政二 小野 さくら

富士山に初めて登り富士山の大きいなる姿に心

## 第十二班

東北女子大家政二 芳川 愛

山登る足の痛さもしばし忘れ富士の頂仰ぎ見ることかな

富士登山の折

人々の触れ合ひそこに見つれたり「こんにちは」の声心に響き

東北女子短大保育二 小三 林 亜矢子  
み友らと共に登りし今日の日を忘れはしない  
いついつまでも

富士山に友らと登りし今日の日を楽しき思ひ  
我は忘れじ

宝永の河口の景色に胸打たれ我の心は昔に返りつ

温かく包むがごとき富士の山それを見る度父母想ふ

多摩美術大美術一 西原 さや香  
道の辺に愛らしく咲く桃色の花に疲れをしば  
しいやしぬ

山口県立衛生看護学院第一看護一  
橋本 朋子

見渡せば富士の自然のただ中にあると思ひて  
心はづみぬ

心はづみぬ

九州工業大情報工学四 上河 真子  
心より望みし願ひ通じたり雲晴れ見えし富士  
の頂

九州大理卒 石川 麻由

美しき緑あふるる林道に木漏れ日さして心地  
良きかな

福岡県立嘉穂高校教諭 小野 吉宣

占部兄の講義をききて

いてつきし真冬の富士に日の丸の御旗たてむ  
といざり進むや

山頂の突風はげしく懐に御旗をたたみ天長祝  
ふや

熱湯を風力計に注ぎかけ観測活動続けたまへ  
り

富士登山

宝永の噴火口のあとに日はさして赤く照り映  
え去りがたく見つ

### 第十三班

在宅看護支援センターコスモピア熊本

折田 成 予

転びたる友の姿を見やりつつ我もよろけり富  
士の山道

初参加日頃見せぬ顔垣間見る父と学びし富士

の合宿

東北女子短大生活二 澤 井 一 葉

古<sup>いにしへ</sup>ゆ幾多の人の通りたる富士の山道踏みし

め登る

山口大教一 竹 下 真 生

宝永の頂走る白雲を見上げてをれば力湧き来  
も

東北女子大家政二 大 池 麻 心

白雲の流れは速し悠久の時を重ねし火口の壁  
を

(有)万 デザイナー 諏訪田 尚 子

火口原ゆ仰ぎて見れば宝永の稜線美しく我描  
きたし

福岡県立大人間社会三 井 上 智 晴

富士の峰巒に頬を寄せたれば国の鼓動の聞こ  
ゆるがごとし

熊本県立教育センター第二研修部主幹

白 濱 裕

伊藤哲夫先生御講義

ひたひたと寄せ来る波のごと中韓の干渉やま  
ずいきどほろしも

先人の思ひに連なる学びもてみ国を護る礎と  
せむ

### 第二十一班

船橋市議会 中 村 実

富士新五合目より山頂を仰ぐ

頂きの<sup>はかりや</sup>測候所遙か仰ぎ見て父祖の偉業を偲び  
まつりぬ

小田原城内高校教諭 原 川 猛 雄

一面の雲におほはれ富士山の尊き御姿見え  
なりけり

富士登山に出かけし友らはさはりなく楽しく  
コースを歩みますらむ

さいたま住宅検査センター

村 山 寿 彦

富士登山のをり

宝永の第三火口をのぞきをる吾が足もとをて  
ふの舞ひゆく

生けるものなきがに見えし噴火口を舞ひゆく  
てふにしばし見とれり

主婦 尾 関 千 枝 子

日の丸の揚げらるる時待ち兼ねし富士朝雲の  
上に現はる

中村学園大教務課 中 村 智 道

心地よきそよ風うけて仰ぐかな日の本一の富  
士のみ山を

中島法律事務所 中島繁樹

電源開発(株)関東支社支店長代理

植田伸一

山はだの見上ぐるかなたいただきに白きドームの屋根しるく見ゆ

富士山に登りて

## 第二十三班

アサヒ飲料(株)顧問 坂東一男

雲晴れて青空に映ゆる頂の神神しさに感動覚

富士宮新五合目

ゆ

伊佐ホームズ(株)取締役社長

一歩づつ踏みしめ登る山路にオンタデ花の黄色うつくし

流れゆく濃き山霧の晴れ間よりあらはれいづる富士の頂

社員とともに合宿に参加して

六合目山小屋通過

宮城県立柴田農林高校教諭

若き日ゆめめし道に嬉しくも我が社員らも今加はりぬ

息あがり登りの坂を越えきたり杖を求めていざ下りなん

加藤英夫

宝永第二火口

ともしびを心にともせ若人よ良き師の言葉の

はせて

力を受けて

浴槽で古き友らとにこやかに顔出したりしわが社員はも

富士宮新五合目に到着

熊本市役所東部環境工場場長補佐

折田豊生

五合目にやうやういたりみあぐれば陽光浴びし頂き目向ふ

伊藤先生の御講義をお聴きして

古き友が社員のことを

第二十二班

日本は愚によりて亡びむとふみことばを襟正さるる思ひして聴く

よと喜び語りし

川重八千代エンジニアリング(株)担当部長

国のため命捧げし先達のみ声聴くごとし大人のみことばは

富士登山の写真を撮らんと構へれば恩師の笑顔見えてうれしき

山本博資

レクレーションにて

伊佐ホームズ(株) 谷本繁彦

富士山宝永火口登山(八月三日)

ゆるやかに霧を巻きつつ山肌をなで登りくる

影島興産(株)取締役社長 影島一吉

たえまなく動きて止まぬ雲霧の姿かたちの面白きかも

風心地よし

影島興産(株)取締役社長 影島一吉

み友らに交りて吾娘もにこやかに語れるを見れば心安らぐ

み友らに交りて吾娘もにこやかに語れるを見れば心安らぐ

先人の思ひを胸にいだきつつ学び行かなむ我が国の為

すなほなる吾娘の顔ほど麗しきものはなき

すなほなる吾娘の顔ほど麗しきものはなき

先人の思ひを胸にいだきつつ学び行かなむ我が国の為

り大人となりても

り大人となりても

り大人となりても

が国の為

が国の為

が国の為

宝永第二火口にて

東京芸術大音四 藤波ゆかり

嘉穂高校一年 小野 佑

たちまちに霧晴れわたり岩山の雄々しき姿あらはれにけり

雲晴れてなだらかに続く山の端の空の青さに映ゆるを仰ぐ

富士山の森林コース下山して聞こえる音は鳥の声かな

防衛庁契約本部 鏗 信 弘

福岡コミュニティ放送(株)(FM Mimi)

(二回目の作品)

富士登山

江崎 志保

落葉松の林に入れば美しく小鳥囀り心和む

はひのぼる雲の切れ間にはるか遠く白きドームの姿見えたる

五日間富士を背にして働らいて今の気分は満足げなり

林の中一面の草のをちこちにオレンジ色のクルマユリ咲く

あれがかねて見たしと思ひし富士山の頂きなるかとしばし眺むる

香住丘高校英語科 小柳 マホ

オレンジの花びら反りしクルマユリ小さき姿の愛らしきかも

雲晴れて富士の山頂見えければ日本の宝に心動かす

アルバイト目立たぬ仕事黙々と気づいてみれば大きな役目

野中千代を偲ぶ(占部先生の御講義)

西部ガス(株)人事労政部 中山 史

(二回目の作品)

富士山の斜面険しも夫追ひて凍てつきし冬に君は登りし

レクレーションにて

(社)国民文化研究会 有本 和香子

大君の生れましし日を祝ひまつらむと凍てつく風

オンタデは生ふれど一面火山礫の姿荒々し宝永火口は

昨年はお初めて参加す合宿に今年に催す側に廻れる

日の御旗掲げて祝ひまつらむと風荒ぶ中をいざりゆきけり

たちまちに雲流れゆきまなかひの稜線しるし青きみ空に

霧はれて御姿現す雄々しき富士墨の流れたやうな稜線

凍傷に足は萎えしも大君を祝ひまつらむといざりゆきけり

赤茶けし宝永火口の山塊のいさす光にはゆる見さけつ

御殿場の四方の御空に薄絹おりの咲弥姫の御裳裾のごと

道路わきの水田をみて

富士の水飲んで実れる稲うつくし受ける恵を  
全て<sup>あき</sup>品らに

(二回目の作品)

おぼろげな人の輪年の瀬越ゆるごと心を結え<sup>ゆ</sup>  
た綱となれかし

近畿大学 福岡 鉄平

霧深い富士の五合目着く頃に晴れて輝く名の  
知れぬ花

## 国民文化研究会

朝の集ひ  
拓殖大学総長 小田村 四郎

深みどり澄みわたる空に富士の嶺は朝日を浴  
びてあざやかにそびゆ

緑濃き富士のふもとに集ひ来て国旗を仰ぐあ  
したすがしき

故松吉基順兄を偲ぶ

夏のつどひに来るたびに思ふ夜更けまで語り  
合ひにし君が面影

去にし年もまたこの年も懐しき君いまさぬが  
淋しかりけり

合宿感想自由発表

学問への意欲湧きぬともごもに語る友らの

言葉嬉しき

国民文化研究会理事長 上村 和男  
五合目にバスにて着けば頂上に登り行く人あ  
また見えけり

宝永の噴火の跡の激しさをしぬばれにけり火  
口に立ちて

友どちと登り下りを楽しみつ語らひすごす時  
のうれしき

(二回目の作品)

野間口行正兄を偲ぶ

君逝きて七年なるも今もなほ身近く思ふ今日  
のみ祭り

君偲び斉庭べに立てば月影もさやかに映えて  
君ゐますごと

(株)宝辺商店取締役会長 宝辺 正久

登山

谷下ゆさがしきなだりを這ひ上る霧たちまち  
にわが前とざす

岩みちの高きに立てば先に行きし友らゐたり

さ風のすずしき  
砂走りの山ちを高き声あげて駆け下りるあり

若きをとめら  
はへ松や低きかんばも生ひ立てる森みちゆけ

ば木洩れ日さしぬ

(二回目の作品)

慰霊祭のあと

雲払ふ満月の空遠くより爆音聞こゆ友が呼ぶ  
がに

しんしんとさびしき思ひす月わたる富士の広  
野の空見上げつつ

元九州造形短期大学教授 小柳 陽太郎

八月二日早朝

よべの霧くまなくはれて西空に大富士が根の  
さやにそびゆる

もろびとの国のいのちと慕ひこし富士のみ山  
を今仰ぎ見る

留守守る妻に見せたしさやかなる朝空に立つ  
富士の神山

すぎし日の伊豆の旅路に妻と見し速富士がね  
をはろにしのみつ

朝目すがしく仰ぐみ山のふもとべを純白の雲  
やりに流るる

(二回目の作品)

慰霊祭

夜のとばりとざす齋庭に流れゆく友うたひま  
す「ますらを」の歌

「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみ  
かさねまもるやまとしまねを」(二井甲之)

胸にしむる友朗詠のたかなりの波うちひびく  
遠き夜空に

はりつめし心はとけて亡き友のなつかしき面  
は浮びやますも

折しもあれみ空はるかに雲はれて満月の光  
庭照らせり

元電源開発環境立地本部長代理

長 内 俊 平

富士山五合目にて―友らを待ちつつ―  
谷ぞこゆ霧のほりくる森にしてうぐひすの声  
ま近くきこゆ

みはるかす谷の彼方はみえずしてただ一面の  
霧の海原

上めざす友らやかに手をとりて難き坂道登  
りゆくらむ

(二回目の作品)

ふたとせぶりに寝起きを共にすごしたる友ら  
といまは分れかゆかむ

六日前来りしこともはるかなる昔のこととも  
おもほゆるかな

この道は日の本おこすまさみちとさらにも思  
ふ若きらみつ、  
老いの身をかこつべしやは帰りたらば何かを  
せむとわきたつものあり

千代田漢方クリニク 桑 木 崇 秀

合宿に来る

古き友らと会ひたき心に出でて来ぬ八十余り

六とせの老いたはりつ

若きらと暫し語らふ喜びを思ひ描きつつ我は

来にけり

若きらよまがつ世直すは君ら措きて他にはあ

らじ唯君ら頼む

(株)中央塩ビ製作所会長 星 野 貢

伊藤哲夫先生の御講義をお聞きして

心こめ語りつがる、御講師のみ言葉身内にし  
みわたるかな

国柄を根こそぎ絶やすてふおぞましき策ぞに  
くらし我は忘れまじ

東京裁判無効と言ひし辨護士の清瀬一郎我れ  
忘れまじ

(二回目の作品)

胸内はくまもなくして高らかに君が代を歌ひ  
ぬ友らとともに

はらからは声高らかに君が代を歌に奉りぬ  
たゞひたすらに

元政法大学人事部長 香 川 亮 二

十一班の集ひ楽しき短かき間の交はりなるに  
忘れがたしも

己が心友の思ひを心こめて見つめ偲びつつ言  
葉えらびし

一人づ、一首の歌の生りゆくに心開かれて喜  
びあひぬ

うつしゑを眺めつつ思ふすこやかに学びたま  
へや別れ住むとも(集合写真)

舞岡八幡宮宮司 関 正 臣

伊藤哲夫先生御講義にて

先の帝下し賜へる御言葉をただ畏みて頂  
きまつる

大御身を捧げましけるすめろぎの思頼を畏  
みまつる

すめろぎにまつるひまつる国民の鑑と仰ぐ阿  
南惟幾

(二回目の作品)

第四十六回を終へて  
何一つ手伝ひもせず合宿を終へたり友に支へ  
られつつ

友どちの篤き情けに支へられ漸く終へぬ四泊  
五日

元佐賀商業高等学校教諭 末 次 祐 司  
晴れわたる朝の空に清かなる富士の高嶺を  
仰ぎまつれり

東の朝日に映えて真向ふにそびゆる富士の姿  
美し

(二回目の作品)

慰霊祭にて

浄園のしじまの中に朗詠の聲神さびて魂降り  
給ふ

神々に捧ぐる祝詞厳かに亡き友のみ名偲びま

つれり

天翔けりくにか地駈けりつ、國守る魂安かれとひたに祈るも

元浄土真宗僧侶 岡 棟 猛

八月三日早朝に富士を仰ぐ

朝起きて富士の嶺仰げば雲晴れて青きみ空におごそかに立つ

(二回目の作品)

若きらの壇上に立ち決意述べ姿を見れば涙にじみぬ

大日本園芸(株)常務取締役 磯 貝 保 博

青空に姿雄々しき富士の嶺の初めて見えし今朝のつどひに

体操をおはりて見れば雲かかり長き稜線かき消えてなし

(二回目作品)

講義室から流れてくる講師の声を事務局

で聞きながら

訴ふる思ひ伝はり心あつく耳そばだててじつと聞き入る

心打つ御言葉聞きつ参加者の少なきことを口惜しくもふ

小田原市立下曾我小学校校長

岩 越 豊 雄

朝霧のふき払われていつの間に富士の霊峰姿現はす

朝霧の動き早しもたちまちに富士のみ山の姿うせにき

君が代の歌うたううちくつきりと富士の高嶺の現はれいでけり

皆人の気を感じずごと霧晴れて富士のみ山の神さびて立つ

亜細亜大学教授 東中野 修 道

吉川理夫君ゆ急病の知らせ入る

いそがしきなりはひのなか君来ると待ちてをりしに悲しき知らせよ

網膜の剥離の疑ひ浮びきて今日手術に及ぶことあるかと

恐ろしき病ひ乗り越え変らざる光の世界の神に祈らる

国民文化研究会事務局長 山 口 秀 範

あな嬉し祈る思ひに迎へたる富士登山の日に

雨降らざればおほひたる霧あし速く流れ行き宝永山の山容

見える

憩ひつつ語らふうちに霧晴れて陽射しさやかに山肌照らす

国立療養所福岡東病院副院長

小 柳 左 門

合宿地に着きて友らすでに散策に行きて静かなる部屋内ひとりたらずみてをり

ひさびさに会ひし友らは語りつつ歩みゆくらむ富士の広野を

山鳩の声ほろほろときこえけりひとりたらずむ富士の宿舎に

国旗降納の時刻なるらむながれる君が代の調べ胸にひびくも

(二回目作品)

ひちりきの音色すがしと草笛を吹くがごとくに胸にしみいる

ひちりきの音色を聞けば神代より伝はりて来し息吹きを思ふ

関西熱化学(株) 天 本 和 馬

富士登山

足を止めふと見上ぐればおほふごと頂きはるかに雲かかり見ゆ

左の方廻りて行けば突然に宝永火口広がりてあり

大山をすりばちのごとえぐりたる噴火の跡のみまざざと見ゆ

水もなき火口の岩の間にも小さき草の生きつ

きてあり

(二回目の作品)

事務局にて

事務処理に忙がしき中に師の御声はスピー  
カーを通じて我にせまり来

力込め語らるる声にパソコンの指打ち止めて  
じっと聴き入る

いやつぎに語らるる言葉耳で追へど御姿見え  
ずもどかしかりき

山口県立下松高等学校教諭

宝 辺 矢太郎

小野吉宣先生の御講義をききて

マツカアサアに大御身を投げ出されたまふ大  
君あふぎ民らただ泣きぬ

たたかひに打ちひしがれたるくにたみを励ま  
されんと旅立たれたまふ

悲しみにたへたる遺族いかばかりなくさめら  
れしか玉のみ声ききて

力強くしつかりたのむとの御言葉に民ら血の  
たぎりて再興誓ふ

万才の波打ちふるる日のみ旗に埋めつくさ  
れし日本列島なり

防衛施設庁 山 根 清

富士登山の折

ただよへる狭霧の中を一人して来む友ごちを

まつはさびしも

その噴火のさまを偲びつつ宝永火口をか  
なたゆながめけり

流れゆく狭霧の中にひとひらの蝶舞ひゆくを  
しばしながめけり

(二回目の作品)

御講義で小野先生より特攻隊員の話を聴  
きて

国を護る為とはいへど若き命捧げ給ひし御心  
偲ばゆ

限りある命を捨てて敵艦に体当りせし御心偲  
ばるる

血書にて残されし遺書江田島に見しことをし  
も思ひ出せり

神洲の不滅を信じ散華されし人の思ひを我は  
忘れじ

焼津水産高等学校教諭 菅 原 享 二

霧流れ晴れたる空に鮮やかに御山の頂き雄々  
しく見ゆる

(二回目の作品)

起き出でて今日は如何と空を見る移ろひ易い  
山の天気にて

いろいろのことども学びし合宿も今日が最後  
の朝となりぬ

日章工業株式会社 藤 新 成 信

合宿の朝の集ひに来てみれば富士のみ姿あら  
はれにけり

緑こき樹々広がりしその上にはるかにけぶる  
富士の姿は

主婦 工 藤 千代子

みまつりの庭のみ空を仰ぎみれば夜を照らし  
ゆく月さやかなり

愛媛県保健福祉部人権対策課

鳥 生 秀 雄

富士山五合目にて

はるか遠く観測台を仰ぎ見て富士の大きな  
を感じるものなり

(二回目の作品)

合宿に参加したればなつかしき友らに会へる  
は嬉しきことなり

大原簿記専門学校 北 村 公 一

國武先生の御講義にて喜多郎のCD「古  
事記」を聴く

神々の宴の太鼓の音繁く大きくなりて轟き渡  
れり

ひとときの静寂ののち曙の光射すがに澄みし  
音増す

今まさに岩戸開きてみ光とともに大神出でま  
しぬかも

天照らすみ光のさま思はする澄みし音色に心  
震えり

福岡県労働局 古川 広 治

伊藤先生の御講義を聴きて

束の間の聴講なれども先生の熱誠伝はり涙な  
じみ来

庭本兄

体が動けば参加したしてふ友は今差し入れ担  
ひて駆けつけにけり

三林兄

閉会後の片づけ手伝ひ翌朝は職場へ戻ると苦  
もなく言ふ友

国民文化研究会職員 茅 野 輝 章

富士宝永火口登山

二年前雨にはばまれし富士登山今また友と登  
らむと挑む

登りゆく道はけはしけど一歩一歩友と進みぬ  
火口めざして

霧はれてあらはれ出しは山肌の深くえぐられ  
し宝永火口

山肌は銀色にまた赤褐色に輝きにけり陽に照  
らされて

富士山に登り得たるを共に祝ひ友の笑まひも  
また輝きぬ

岡山県立成羽高等学校非常勤講師

横 畑 雄 基

久々に友に会へると楽しみに富士のすそのに  
足をはこべる

合宿を運営されし先輩の姿目にして心うたれ  
る

(二回目の作品)

昭和天皇御製にふれて

國民の事を想ひていつの日もすこされし君の  
御姿尊し

明治天皇御製にふれて

唯一つ國を信じる心持ちて歩み進めば道は開  
ける

合宿地に寄せられた歌

元福岡教育大学教授 山 田 輝 彦

合宿に寄せて(七・二五)

百日紅はや咲きそめて年ごとの合宿の日も近  
づきにけり

すこやかにあれば集ひに加はりて学ばむもの  
を病む身口惜し

神さぶる富士のみ山に恥づるなき国の姿の蘇  
れいま

## あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。静岡県「富士のさと 国立中央青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎようとしてをります。

このたびやうやくこの「感想文集」を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。

この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に「走り書き」していただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

### (一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてあると思はれるところを摘録しました。文章の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを通りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

### (二) 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回のもものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきま

した山本茂夫、磯貝保博、小柳志乃夫、山根清、池松伸典、草野直樹、伊藤俊介の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この「感想文集」の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は中尾国博さん及び福岡鉄平さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上った「感想文集」を、ご精読下さるやう切願してやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたく願ひ致します。

(原川猛雄記)



〔資料〕

第四十六回 “合宿教室（富士）” 感想文集

非売品

平成十三年十一月十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 上和男

編集委員 國武 忠彦 原川 猛雄

茅野 輝章 北浜 道

東京都渋谷区東一十三一四〇二号

〒一五〇一〇〇一一

電話 〇三―五四六八―六二三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

